
ロスト・フィラデルフィア

礎衣 織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・フィラデルフィア

【Nコード】

N4800L

【作者名】

礎衣 織姫

【あらすじ】

人類が新しい地球に移り住み、十四世紀半が過ぎた。人類は身体的な進化を遂げてもなお、相変わらずマフィアやテロの脅威にさらされ、それらに立ち向かう軍事機関なくしては生きて行けない世相であった。そんな中、第3段階の進化系であるシーランにテレキネシス能力を司る遺伝子「セフィラ」が発見された。しかし奇跡的にその能力を覚醒させた一人の少年シギルが暮らしているのは、巨大テロ組織ガゲード・パラディオンの研究所だった。

セフィラ遺伝子研究の第一人者であるラウ・コード博士がシギル

に懸念していることは、彼がシーランの最たる者であるということ
と、狂人であるガゲード・パラディオン総統スカイフィールズの道
具として利用されることだ。そして何より、博士は少年に対して取
り返しのつかない罪を犯していたのである。

今こそ、その罪を償う時だと、博士は決意した。

01 (前書き)

SFファンタジー？軍事ものですが戦闘シーンはそれほどありません(たぶん)。一見こ難しい感じですが、全然そんなことありません。同性愛ネタもあるので、ムリな方はご遠慮下さい。男女の普通恋愛もあります。基本的には真面目なお話です。宗教ネタもありますが現存する宗教とは一切関係ありません(参考になっている程度です)。また宗教を支持するものでも批判するものでもありませんのでご了承ください。

注意

ただいま再編集集中。再掲載日は未定です。

時は第二地球惑星暦一三三四年。人類が生まれた地球を捨て、太陽系を越えてから十四世紀半が過ぎた。思い返せば、「第二の太陽系」と呼ぶにふさわしい銀河の、この惑星とめぐり会えたことは奇跡と言うしかほかにない。

それはまさに「地球の終わり」という時だった。要因は昔のSF小説や映画にあるような、人間によってもたらされた悲劇や隕石の衝突ではない。星の寿命という物質世界の定めにしたがつた超自然現象だ。

なんにしても、そこで生きる者たちにとっては一大事。結果が同じなら原因など関係ない。人々は一縷の望みを託し、全世界協賛のもと開発した探査機を打ち上げたのである。

銀河探査機は見事に発見してくれた。まるで神によって用意されたかのような惑星を。豊かともまではいかないが動植物が生息し、人が住むのに十分な環境があり、なにより知的生命体の存在がない星。つまり何者とも交渉せずに堂々と入植できる土地だ。

ゆいいつ問題となったのは国土である。すべての国が協力して成し得た危機からの脱出であったのだから、土地の分配が不公平であっては困る。各国は長い話し合いの末、思い切った決断を下した。「我々はみな地球人である。よってこれをひとつの区切りとし、国という概念を捨て去ることを決意する」

誰もが心にいだいていた理想とする形が誕生した。つまり国境が消えたのだ。人類は新たな自由を手に入れた。住処、言語、食料、物資、金、資源……すべてがすべての民の物であり、その恩恵は平等となった。

現在の組織形態の基礎もこの頃ほぼ完成されている。行政機関、軍事機関、法廷機関、警察機関、宗教機関、教育機関、医療機関といった主要部分だ。全機関は独立・分権されており、特に強い権力

を保有している行政と軍を除いては、五機関とも同等に権威を持っている。

こうして新しい地球に歴史と呼べるものを刻んで久しくなりだした頃。

人類は史上稀に見る急速な進化を遂げた。といっても猿から人間にというような明白なものではなく、外見的な変化はほとんど見られない、だが飛躍的な進化だ。

第一段階の進化では、奇形をとまなう遺伝子上のトラブルが皆無になった。

第二段階では、視覚・聴覚の障害を持って生まれる子がいなくなつた。

第三段階では、ガン細胞を発症する確率が格段に下がった。

つまり遺伝子が正常化、安定化、そして強化されていったのだ。それは人類が想像もしていなかった、願ってもない副産物だった。

段階系の型が固定してくると、各人種の大別がなされるようになった。母なる地球より渡って来た従来型の人間をアースリング。一世紀なかばに現れた第一段階系の人間をネオ・ゲノム。六世紀後半からの第二段階系をアドサピリア。そして十世紀初頭に誕生した第三段階系となる人間をシーランと定めた。

しかし同年、アースリング最後の生き残りであるレイモンド・オクラが永眠したことによって、ひとつの大きな時代が完全に幕を閉じた。オクラは享年百三歳だった。

だが新しい地球での暮らしは良いことばかりではなかったし、いつまでも平穏ではなかった。国境こそなくなったが、新人種が多様化してくると小競り合いや衝突はさけられないものとなり、人類はアースリングが築いた初心を忘れ、理想郷を踏みじり、再び戦闘や紛争を各地で起こした。ある時は強大なマフィアが世界を牛耳り、ある時はテロリズムによる破壊活動が頻繁におこなわれ、ある時は

政治家による汚職事件が世相を乱した。

一三五二年。ベストラ・スエム率いるマフィア集団が結成される。北大陸西南部の海岸沿いにあるキングフィッシュャーズ・レイクを拠点に拡大を続け、麻薬、ギャンブル、売春、恐喝、詐欺、人身売買などの、ありとあらゆる悪行を基本財源とし、やがては油田や鉱山から出る収益や各企業団体の利益、最終的には税収まで懐に納めるほどの圧力と勢力を獲得した。

一三五四年。第三段階進化系「シーラン」に対する医学研究において、テレキネシス能力を司る遺伝子「セフィラ」が発見される。発見者は生物学博士ラウ・コード。

一三五五年。ラウ・コードの発見に触発された数名の若い研究員による、セフィラ研究所ガゲード・パラディオン（通称GP）設立。

一三六〇年。正規研究所であったはずのGPが突如テロ組織へと変貌。時同じくしてラウ・コード博士が行方不明となる。

一三七〇年。ベストラによって長く無法地帯であったグラスゲートに、孤児である子供たちだけの組織が立ち上がり、驚くべき快進撃でベストラ・ファミリーを撲滅。リーダーは弱冠十一歳の少年だったというのが詳細は語られていない。

一三七二年。ベストラ・ファミリー壊滅の影響を受け、それまで息をひそめていたテロ集団が活発化。中でもGPは最も巨大化した。

一三七四年。消息を断っていたラウ・コード博士がGPの専属学者として再び世に現れた。セフィラ覚醒実験の成功論文を作成、発表。ただし被験者の顔や氏名、年齢、その他の詳細などは公表せず。

現在も一個体であるこのシーランはGPの手中に置かれているものと思われる。論文に示されたセフィラの能力値とその可能性は底知れず、それはラウ・コードの名を高めると同時にGPの脅威を増幅させた。

政府はテロ対策として軍事拡大支援を余儀なくされ、毎年、税の三分の一を軍資金として民衆から吸い上げている?????

乱れた灰白髪と年輪を刻んだ顔は、騒々しく唸る警報と炎に照らされていた。両眼には光が、ささやく声には力が込められた。その男、ラウ・コード博士は、七十を過ぎたとは思えない気迫で今、十五歳の少年と向き合っている。

「いいね、シギル。ここを出たらずくに南大陸へ飛びなさい」

そう言い、少年の手にプラスチックカードを握らせた。

「これは、おまえのIDカードだ」

少年がカードを覗き込むと、青銀色の髪と碧色の目をした無表情な自分の顔写真が見えた。横には知らない名前が印刷されている。

「シルバー・クラウド・ラインビル？」

呟くと、博士は一度だけ深くうなずいた。

「今日からおまえの名前だ。それを持ってグラウコス軍事基地へ行き、入隊試験を受けなさい」

すると少年は、少し皮肉気に口の端を上げて笑った。

「スパイでもさせようっていうの？」

博士はかぶりをふった。

「軍に身を隠していれば、とりあえずは安心ということだ」

少年は眉間を曇らせた。

「笑っちゃうね。今日の敵は明日の友？」

互いに、にがい顔で視線を交わす。

ここは北大陸サマイト森林地帯の奥深くに建立された、巨大テロ

組織ガゲード・パラディオンの研究所内である。

少年は博士の手で「セフィラ」と呼ばれる生きた破壊兵器となった、史上初の覚醒したシーランであり、まだ唯一の存在だ。つまり二人にとって軍は最大の敵であるはずだった。

軍とGPとの抗争は十年あまりと比較的浅いが、軋轢は深い。軍の最高位に立つ男がマフィアとテロリズムを撲滅しようという志のもとに生きているせいもあるが、セフィラの登場によって、さらに警戒が強まったためでもある。ここへきて彼らが軍に救いを求めようというのは滑稽な話だ。

しかしもはや研究所は崩壊寸前。少年の脱出を図るため博士が中心部を爆破したのだ。

「ここは何者かによって襲撃された。そしておまえは襲撃による爆発事故で死んだのだ。いいね？」

と博士は念をおす。そんな嘘がどこまで通用するのかわからないが、博士はこの少年をただ自由にするために必死だった。

研究費用欲しさにGPに与したことや、名声に目がくらみ、どこからか拉致された少年の未来をゆがめてしまったことを、後悔していたのである。特にGP総統スカイフィールズについては、悔やんでも悔やみきれない思いだった。

出会った頃のスカイフィールズは五十代前半の中肉で小柄な、野心に満ちた顔つきの男だった。すでにセフィラによって世界を恐怖におとしいれ、殺戮と破壊を夢見ている狂人だった。博士はそれを薄々感づいていながらも、みずから彼の世界に身を投じてしまったのである。研究さえ成功すればなんとかなると……しかし過ちは過ちでしかなかったのだ。

博士は少年をみつめ、肩を抱き寄せた。

「本当にすまないことをした。償いは必ずする。グラウコス基地に着いたらファウスト・ロスレイン大佐をたずねなさい」

「……？」

どうして、と少年は言いかけた。

ファウスト・ロスレインといえば空軍に属し、空中戦において右に出る者はいないと噂の人物だ。『グラウコスの鷹』と称され恐れられている。GPにとっては最要注意人物の一人だ。

ところが博士の口からは思わぬ言葉が出た。

「おまえのセカンドネームはロスレイン。彼はおまえの実の兄だよ、シギル」

少年は衝撃に目を見開いた。

「??? 兄さん?」

「そうだ。ずっと消息がつかめないでいたが、おまえが拉致されたテロ事件のあと軍に保護されていたことがわかってね。その後、彼は君を捜すため軍人になる道を選んだのだ。行方不明者を捜すには良い環境だからね」

「もう連絡を?」

「いや。偽造IDを作るのと受験手続きをするのが精一杯だった」

「じゃあ、まだ俺のことは知らないんだ」

「ああ」

ため息をついて、少年は首を大きく横にふった。

「だったら尋ねない」

「な、なんだと? いったいどうして。せつかく兄弟の再会を果たそうというのに」

「どんなに生まれ変わろうと努力をしても、たとえ一生黙秘して過ごせたとしても、俺がセフィラだという事実は消えない。弟とだけ打ち明けて万事うまくいくなんて考えられないよ。相手は空軍大佐だ。GPの上層だって目を光らせている。それに博士が俺の兄さんを知っているということは、スカイフィールズだって……。もしかしたら軍に利用されないともかぎらない。セフィラだということを隠して生きるなら、兄弟だってことも隠しておくべきだ」

博士は哀しげに眉をゆがめた。

「今はそうだ。セフィラだと公表するには時期尚早だ。できうるかぎり隠しておくのがベストだと思う。しかし私は、もし正体が明る

みに出て周りの組織に甘えてもいいのではないかと思っているのだよ。セフィラはこの世の脅威でも、おまえ自身は脅威ではない。そのことはきつと心正しい者がよく理解してくれるはずだ。時間をかければ、より多くの者がわかつてくれるようになるだろう。私がおまえをグラウコスに送ると決めたのには、その想いもあるからなのだ。だが、おまえの望みは別のところにあるようだな」

少年は黙った。

「シーラン特有の血だな」

と博士は言った。

シーランは、最も兄弟愛の深い種として知られているからだ。同じ両親を持つ者同士でしか血液型が一致しないという特徴を持つため、医療の点から見ても大切な存在である。彼ら自身は「人間愛なのか単なる自己防衛なのかわからないが、とにかく兄弟姉妹への想いは魂を分かつほどのものだ」とも言う。

それを博士は密かに、世界から人類が淘汰されていく前兆なのではないかと脅えていた。

極端な話、シーランは兄弟さえいれば良いからだ。ともすれば、そのために人間の三大欲である「物欲」「性欲」「食欲」を切り捨てても生きてゆけるといって、高僧のような精神構造を持っている。ゆえに既婚者は稀だ。しても離婚率が高く、必然的にシーランから生まれる子供は少ない。いわゆる少子化。そこが問題で、実はシーランの人口減少はダイレクトに「人類滅亡」へのカウントダウンなのだ。

かつてアースリングがネオ・ゲノムにとって代わられたように、進化によってネオ・ゲノムはアドサピリアに、アドサピリアはシーランへと変化している。歴史は逆行することなく、アドサピリア同士の夫婦間にシーランが誕生することはあっても、シーランの間にアドサピリアは生まれえない。この進化をたどればシーランによって人類は終焉の時を迎えるだろう。

シギルにも、もう兄を慕う心が芽生えている。博士にはそれがわ

かった。シーランでなくとも血のつながった兄弟がいると知らされれば動揺し、逢いたいと願うのが普通だ。シーランなら、なおさら切実であろうと。

「自分の運命がお兄さんの生活をおびやかすのではないかと、気に病んでいるのだね」

勝手に断定的な見解を示したが、はずれてはいない。少年の瞳の翳りが答えを導き出している。シーランであることの哀れを感じずにはいられない博士だったが、今は感傷にひたっている時ではないと、シギルの両肩を強く叩いた。

「君がたずねたくないと言うなら無理強いはしない。だが入隊は必ずするように。グラウコスは軍の最高峰。スカイフィールズから最も遠い場所だ」

少年はうなずき、博士に先導されるまま研究所から脱した。外は暗く、星の明かりが見えた。草の間からは虫の声が聞こえた。

「博士、元気で」

「ああ、おまえも。幸福を祈る」

短い挨拶のあと、少年は蒼いオーラに包まれて宙へ浮かんだ。遙か上空にまで高度を上げ、流れ星が去るように天を駆ける。

博士は夜空をまぶしそうに見上げた。

「シギル、おまえは素晴らしい。おまえに逢えて私はとても幸せだったよ」

夜明け前。南大陸の東に位置するグラウコス軍事基地の門前。五百メートルほど離れた先の林の茂みにシギルは降り立った。あたりはまだ薄暗く、人の気配はない。横に長く縦にそびえる塀が遠く、まるで遺跡のようにひっそりとたたずんでいる様子が見えるだけだ。シギルはその場に座り、夜明けと検問所の開かれる時を待った。

ここグラウコス基地は、世界に七ある軍事基地の中で最も大きく、総本部を中心にかかえている。兵士はおよそ二万五千人前後。その他、救急隊や医療班、管制塔員や兵器の整備班等を八百人ほど雇用している。多くの精鋭が集い、毎年、士官候補となるような新入隊員が募られるほどだ。

士官候補は入隊試験結果や実際の訓練、実績を通じて、將軍の地位にある者から選ばれる。入隊試験さえ突破すれば誰でも士官になれるチャンスがあるというわけだが……

国という概念がない現在では、テロか緊急災害時でもないかぎり出動はしない。よって実績を積むのは困難となっている。士官または士官候補となるには、將軍の目にとまるという運も必要なのだ。

三時間ほど経過した。朝日が照らしはじめた大地をみつめ、シギルは立ち上がった。検問所が開かれたのだ。ゆっくり門に向かって進むその足は、重くもあり、焦燥にもつれそうでもあった。

「IDカードをご提示ください」

検問のいかつめらしい兵士が言った。シギルはカードを提示し、職務質問を受けた。

「ここへはどういったご用件で？」

「入隊試験を受けに来ました」

「お名前は？」

「シルバー・クラウド・ラインビルです」

「それでは少々お待ちを」

兵士はIDカードを機械に通し、データとの照合をおこなった。

一分後、カードが手に戻された。

「受験登録データと一致しました。どうぞ、お入りください。会場はまっすぐ行って突きあたりを左、一ブロック目を右に曲がった所です」

「わかりました。ありがとうございます」

それから続々と、シギルと同じか少し年上くらいの少年少女たちが同じようにして門をくぐった。両親に見送られる子も少なくはなかった。シギルはそんな子供たちを横目に敷地内をキョロキョロと見まわした。規模は大小様々だが、建物は半球体のシェルターのよくな造りで地味な土色をしている。

また、ちらほらと姿を現しはじめた兵士の中に大佐の記章をつけた者がいないかと無意識に目をやった。だが深緑を基調とした軍服姿の上等兵や二等兵、グレーの制服に身を包んだ新入隊員ばかりだ。黒を着る士官はいない。残念ながら試験会場までの道のりで、そういった人物に出逢うことはなかった。

試験は筆記と実地に分かれていた。試験期間は二日。本日は筆記試験である。この筆記で優秀な成績をおさめた者だけ基地内の宿泊施設で一晩明かし、翌日の実地試験を受けることができるのだ。

シギルは明朝、実地試験に臨んでいた。筆記試験を突破したのである。実地試験は訓練施設区域内にある陸軍管轄訓練場で開始された。基本的な体力測定のと、「ワイヤーを使った高所から低所までの移動と低所から高所への移動」、「人命救助における基本動作」などの項目がおよそ二十五項目、課せられた。

試験結果は夕方、測定員五名のほかに三名の士官によって決定される。士官選考員については毎年無作為で、今年は陸軍大佐、空軍中佐、海軍大尉が選出されていた。

陸軍大佐はサウス・ウィビンという二十一歳の男で、茶髪に茶色い瞳をしている。物腰やわらかな長身の二枚目だが、『大陸の龍』と渾名をつけられるほど勇猛果敢な人物として一目置かれている。

空軍中佐ルーヴ・サーヴァル・メイレンは二十三歳の男で、黒髪に切れ長の黒目。東洋系でやや細身。あまり目立った功績はないが、計算能力に長けた人物として重宝されている。

海軍大尉は、女性ながら男性陣に引けを取らぬ手腕をふるい、過去の海上戦、潜水戦ともに武勇をとどろかせた金髪の美女である。

歳は二十歳。名をマチルダ・マイセンといい、彼女の父が『海神』の異名を持つ海軍大将フォレスト・マイセンであることは有名だ。今回の入隊試験は受験者数五百名。実地に残れる者はその内の半分。さらに合格者となるのがその半分というものだったが、審査員の測定員と士官選考員の前に並ぶことができたのは百十三名と、若干定員を割る結果になった。

軍服姿ではもったいないほどのブロード美人・マチルダが、大尉の記章を襟元に光らせながら、前列に並ぶシギルをみつめた。

「あなたがシルバー？」

「はい」

シギルは軽く敬礼し、マチルダは細く美しい眉をひそめた。

（ちょっと華奢ね。それに、ずいぶんおとなしそう。記録は間違いないんでしょうね？）

と疑わしげな視線を投げる。が、それも束の間。彼女は微笑み、「人は見かけによらないものね。すばらしい成績よ。トップだわ。おめでとう」

と言った。一瞬、全員の目がシギルに向けられた。それは嫉妬と

羨望の混じった鋭い眼差しだったが、シギルはたじろぎもせず淡々と会釈をした。

「ありがとうございます」

「あら、どういたしまして。あなたのように文武両道で容姿のいい子は、こちらとしても大歓迎よ」

シギルがなにか返答に困ると、横からサウスが口をはさんだ。

「マチルダ！ 新人に手を出すなよ！」

無造作に手にある資料でマチルダの豊かな胸元を叩く。が、その行動は親愛の情の深い、とても慣れたやりとりのように映った。

「あら、人聞きの悪い。私をそんな浮気者だと思ってる？」

「違うのか？」

サウスがおどけた口調で問い質すと、マチルダは両手を腰にあてすねてみせた。

「失礼ね。私はファウストひと筋よ！」

突然出てきた兄の名にシギルはドキッとした。そんなシギルに気づいたのかいなか。ふとサウスの視線が熱くそそがれた。

「君」

「はい」

「かわいいね」

「は？」

「いやー好みだ。俺と付き合おうよ」

公衆の面前で大胆に告白するサウス。その腹にマチルダがすかさず肘鉄を食らわせた。

「さっき手を出すなって言ったの、あなたでしょう!？」

「ぐはっ。相変わらず容赦なしだな、マチルダ。俺は今の一撃で死ぬぜ」

「バーカ」

オーバーに苦しんでみせるサウスに冷たく言い放つと、マチルダは新入隊員に向きなあった。

「ゴメンなさいね。こんなバカは放っておいて、みなさんがお待ち

かねの合格証書をお渡ししましょうね」

「こら！ バカとはなんだ、バカとは！」

マチルダは、となりでわめくサウスをわずらわしそうに無視した。
「名前を呼ばれたら返事をして前に出なさい」

新入隊員は全員あきれた様子で二人を、特にサウスを見た。が、シギルだけは冷静に彼を見据えた。

（大陸の龍も海神の娘には敵わないようだな。でも俺はピスマイヤーの一戦を覚えている。空軍指揮官ファウスト・ロスレイン、陸軍指揮官サウス・ウィビーン?? 噂に違わず最強コンビだった。あの時はたまたま凌げたけど、今度やりあつたらどうかかな？ もう二度と当たりたくない相手だ。特に一人は兄さんだし）

サウスは一人違う視線をくれるシギルを敏感にも察知し、首をかしげた。

「どうした。俺の顔に何かついてるか？」

シギルは少し眉尻を上げた。

「いえ、ピスマイヤーの一戦でのご活躍を耳にしたことがあります。指揮官をなさったそうですね。大佐はあれで大陸の龍という名を不動のものにしました。こんなに早い段階でお会いできるなんて思ってもみなかったものですから」

サウスは露骨に驚いた。

「コアなこと知ってるな」

シギルはすかさずニツと笑った。

「尊敬していますから」

「へえ？ 面と向かって言われると照れるな。嬉しいよ。ありがとう」

サウスは素直に満面の笑みをたたえた。

どの戦で誰が指揮をしたとか、誰が活躍したかなどということとはほとんど身内か関係者でないと知らない。関心も持たない。軍隊に望んで入ってくる新入隊員ですら、あまり内情というものは詳しくないのだ。

なので、外部から来た人間に褒められたことのないサウスは、未体験な喜びに気分をよくした。さらに、二人の会話を聞いてとたんに目の色を変えた新人連中を見渡し、胸を張った。「ピスマイヤーの一戦は知っている。有名な戦闘だ。あれを指揮していたのがこの大佐？ 嘘だろ？ すごい」と、開いてふさがらない口が物語るのを見て、ご満悦といったところだ。

しかしふとサウスは、にやけた顔を真顔に戻してシギルに視線を返した。

「だがな、ここだけの話あの戦はセフィラー一人のものだと俺は思っている。いや、むしろ確信している」

「???!」

「セフィラを知っているか？」

サウスの問いはシギルの気持ちを沈ませた。それは表情にも表れたが、サウスはセフィラに対する脅威に青ざめたのだと思った。

「はい。唯一完全にテレキネシス能力に覚醒したシーランです」

「そのとおり。GPの手にあるのは悔しいが……ピスマイヤーはセフィラの初陣だった。生きた心地しなかつたなあ。あの恐怖は対峙した者にしか分からないだろう。なにかこう、目には見えない強大な力が大気を包んでいた。もちろん俺は死を覚悟した。実際、死人が出ないような戦じゃあなかつたんだ。しかし蓋を開けてみると、仲間はずれ一人死んでない。俺も生きて帰った。それで思ったんだ。セフィラは始めから死人を出さないようにコントロールしてたんじゃないかって。まいったよ。もう全面的にやられたって感じた。奴にとつちや、あの戦はテストみたいなものだったのさ。死人を出す必要もない程度の。いや、もしかしたら人殺しはしたくなかつたのかもな。なんにしても、GPの支部をひとつ潰した分、戦闘機や戦車はほとんどガラクタにされたから、物質的な損害はデカかつたわけだけだ」

シギルは「当たり前だ」と心で呟いた。

ピスマイヤーでは確かに最初から最後まで戦死者を出さぬように

と努めた。それが博士の要望だったからだ。しかし、それを前面に押し出して戦ってはいない。戦にシギルを起用したスカイフィールズの意図が「セフィラの威光を全世界に知らしめること」だったからだ。そのために軍人など皆殺しにしても構わないとまで言っていたほどだ。

博士とスカイフィールズの希望を同時に満足させるとなると、シギルは相手に死の恐怖を味合わせつつ、実際には救うという繊細な作業をしいられなければならなかった。

『なにがあっても、その力によって人を殺めてはならない。ひとたび誤った使い方をすれば、きつと取り返しのがないことが起こる。私がおまえを地上の悪魔にしようと思つて育ててきたわけじゃないことを、よくわかつてほしい』

博士は常にそう諭していた。シギルは育ての親である博士の言葉を信じた??

シギルは、はかる目つきでサウスをみつめた。そしてひとつ軽いため息のあと、

「セフィラがなにをしようと、あなたが優れた軍人であることに変わりありませんよ、大佐」

と、かつての好敵手を称えてニコリと笑った。一瞬サウスはマチルダと目を合わせた。

(こいつ新入りのくせに、緊張するとか不安に思うこととかないのかね? いくら俺がとつきやすい性格でもなあ。普通は相手が上官つていうだけで畏縮するものだがなあ。こういう態度、誰かに似てるよなあ?? 誰だったかなあ)

ともあれ無事に証書授与式を終えたサウスは、士官食堂へ入って、いつもの席の先客の顔を見た。

「遅かったな。先に食べてるぞ」

さわやかな声で言った先客は、一才歳下の同僚ファウスト・ロス
レイン空軍大佐である。白金の髪が美しく、碧眼で、涼しげな美青
年だ。身長はサウスとそう変わらない一八三センチ強。スタイルも
いい。どうしてモデルじゃなく軍人なのか、意味がわからない男だ。
しかし「グラウコスの鷹」という異名を持つにふさわしく、武勲
もさることながら、威圧的でまったく他人を寄せつけない雰囲気
を漂わせている。怖いと思う分でも親しみを感じている者はいない。
友達といえば同期同位のサウスぐらいだ。ある意味天職なのだろう。
他者とは一線を画する頭脳の明晰さや身体能力の高さを誇り、先人
からは羨望を、後輩からは憧憬を得ている。「恐怖のカリスマ」的
存在である。

さつきは、この体格差やクールなイメージが邪魔をしていたせいで
気がつかなかったのだ。サウスはなにげに眺めていて、不意に「
あ！」と声を上げた。

「そーか、そーか」
などと一人納得しながら、ファウストの向かいに腰かける。ファ
ウストは軽く首をかしげた。

「どうした？」
サウスはテーブルに腕をつき、やや身を乗り出した。
「いやな、今日入って来た奴の中に妙に落ち着いたのがいて、誰か
に似てんなーと思ってたんだよ」

「それで？」
「おまえにそっくりだ」
サウスに指差され、ファウストは眉尻をピクリと上げた。

「ほほう、どのあたりが？」
「自信ありげなところが」
「俺はそんなに自信ありげか」
「ありげだね。まあ実際、自信もつくだろ。満点でトップ合格だっ
たし」

「へえ、そいつはスゴいな。いくつだ？」

「十五」

「……十、五？」

端正な眉目をひそめ、ファウストは持っていたフォークを置いた。
「段階系は？」

「アドサピリアと書いてあったけどな？」

なぜか真剣に尋ねてくるファウストを不思議に思いながら、サウスは答えた。

「それが、どうかしたのか？」

聞いてみたが、ファウストはうつむき、暗い表情で視線を少し横に流しただけだった。サウスは頭をかきつつ席を離れ、バイキングへと向かった。サラダを取る途中、ちらりとファウストをふり返ってみたが、相変わらず黙して動かない。

(なんなんだ、いったい)

サウスは顔を戻し、チキンをトレーに乗せた。その際、ちょうど並んできたマチルダの腕を肘でつついた。

「よお、マチルダ」

「なによ」

「ファウストがおかしい」

「あら、あなたにそんなこと言われたら、彼は二度と立ち直れないわ」

「こらー、真面目に聞けよ」

「なんなのよ」

うつとうしそくに返されたが、サウスは気にせず言った。

「ほら、シルバー・クラウス。今日入って来た、かわいい子ちゃん」

「それが？」

「そいつの話をしたら急に黙っちゃって」

「なんで？」

「わからないから聞いているんだろー？」

「どうして私に聞くのよ！」

「彼女だろ？」

「彼女つたつて、まだ付き合い始めたばかりよ？ だいたいあの人、あんまり自分のこと話さないし」

「ひとつくらい思い当たることーねえのかよ」

「うーん」

マチルダは人差し指を顎にあてて、あれこれと原因になりそうなことを考えた。そしてなにかに思い当たったような顔をした。

「そういえば彼、生き別れた弟、捜してなかったかしら。たしかシルバー・クラウズくらいの年頃よ？」

「あ」

サウスは思わず、自分の口を手でふさいだ。

（そっか、それでか。マズいな、そりゃあ。弟と似たような歳で自分にソックリなのが入って来たなんて聞いたら、そうじゃないかと期待するよな。ああ、なんてこった。ただでさえシーランはブラコンなのによー）

サウスが己の失言を悔いている時、シギルは新入隊員用の四人部屋にある二段ベッド上段に寝そべった。向かいの上段には、リベリ地方「北大陸の東にある農村地帯」から来たラスク・エロル（十四歳）が、その真下には地元グラウコス出身のルーク・リース（十六歳）が、そしてシギルの下段にはディストール南部「南大陸最南」育ちのゾイツク・ランドン（十五歳）が入居した。ドアを開けると左右に配置されている二段ベッドのあいだは、わずか一メートルの間しかない。寝る以外には用のない作りの部屋だ。

「みんなで食堂、行かないか？」

ルーク・リースが年長者らしく述べた。誰もがうなずき、もらったパンフレットの施設案内地図を確認して食堂へ向かった。上等兵以下の者が利用できる食堂は一般食堂で、士官食堂は七メートル幅の通路をはさんだ真向かいにある。双方とも出入口は白い金属製の自動扉だ。収容人数は一般で五千人、士官で六十人。

「俺、トイレに寄ってく。先に行行って」

途中、シギルは三人に言い置き、トイレに立ち寄った。そして遅れること約五分、ひとり一般食堂の自動扉を開けようとした、その時。

真向かいの士官食堂から出てくる二人の男を目にとめた。一人は陸軍大佐サウス・ウイビーン。もう一人は見たことのない士官だ。

視力にも優れたシギルは次の一瞬で、襟にある空軍大佐の記章を発見した。胸にある横に長方形の小さな金属プレートも見た。プレートには名前が刻印されており、そこには「ファウスト・ロスレイ」と、確かにある。シギルはとっさに目を伏せ、自動扉を開けて食堂へ駆け込んだ。

一方、そんなシギルに気づいていたサウスとファウストは、少し通路で立ち話をした。

「ほら、今のが満点トップ合格の奴。シルバー・クラウズ・ラインビル。かつわいいだろう？」

勇猛果敢と誉めそやされているとは思えないほど、ゆるみきった表情で語る友人を見て、ファウストは眉間を寄せた。

「見るからに、おまえの好みだな。規律第三十一条を言え」

サウスはとたんに暗くなった。

「新入隊員との交際は禁ず」

「よく言えました。くれぐれも優秀な人材をダメにしないでくれよ」

これは、想像を絶するほど厳しい初頭訓練中に、本来なら恋愛どころではない立場の新入隊員が、たまにそういう状況におちいつて脱落していく者がいることを危惧し、作られた規律だ。一見くだらないが意外と重要なのだ。

「ようく肝に銘じておりますよ。なあに、たかが一年の辛抱じゃないか」

「一年経つたら付き合うつつもりか？」

「ふられなければな」

「おまえなんか、ふられるさ」

「ぐえっ。マチルダより容赦ねーな。しかーし！」

急に元気を盛り返し、サウスは声を張り上げた。

「実は何を隠そう、俺はあの子の尊敬の的なのだ。どうだい、脈ありな感じだろ？」

ファウストはしらけた様子で腕組みした。

「ほーお。それではせいぜい、この一年間は少年の持つ理想像を壊さんように生きることだな」

「うぐっ、貴様それでも友達か」

「さあ、どうだったかな？」

含み笑いとともサラリと言って歩き出したファウストの背を、サウスは追いかけるように歩を踏んだ。

「こらこら、待ちなさい、その戦友！」

その夜、シギルは眠れずにいた。初めて見る兄の姿が、まぶたに焼きついて消えないのだ。

(まいったな、似てる。まあ、兄弟だから無理もないけど)

左に寝返りを打ち、壁をみつめる。シギルの瞳は不安に憂えた。そのうち博士の作成した偽造IDのことが気になり出した。入隊試験の緊張から解放され、少し冷静になったためともいえる。

翌日の昼休み。IDの詳細は調べておく必要があるだろうと、シギルは休憩所にあるパソコンで自分のデータを引き出し、閲覧した。休憩所にはフリーのカフェバーとカフェテラスがあり、脇にセパレーターで区切られたネット用のパソコンが置いてある。パソコンは、直径五センチの球体中央にあるレンズから発信される光が、四十五度角に設置されている二十インチ、〇・〇一ミリ幅の透明なディスプレイの背面に当たると、前面にパソコン画面として映るというタイプの最新機種だ。操作は画面に直接触れておこなう。

シギルは、外付けされているカードリーダーにIDカードを通した。

『氏名〓シルバー・クラウズ・ラインビル。』

生年月日〓一三七二年十月十八日。

性別〓男。

出身地〓フリーユージア。

血液型〓B。

人種〓アドサピリア。

詳細〓クール・ケインズ・ラインビルとサラ・ビーンズ・ラインビル夫妻の間に生まれる。両親は一三八〇年没』

(なるほど。死んだ人間の忘れ形見ってことか。フリーユージアなんて僻地もいいとこだな。身寄りも友人もなく、ひっそり暮らしてい

た夫婦の子なら、まず本物かどうか確かめようがない。本当にライ
ンビル夫妻に子供が生まれたのかどうかさえ、誰も実証できない。

シギルはウィンドウを閉じ、システムを終了させ、イスを離れた。
その足でカフェバーへ向かい、セルフコーナーで紙コップにブラッ
クコーヒーをそそぐと、歩き出しながら飲み干した。空になったコ
ップは六メートルも先にあるゴミ箱の中へと、正確に投げ入れられ
る。周囲は気がつかないが、これは念動力の賜物だ。

そんなシギルの行動を、少し離れた位置から眺めていた男が言っ
た。

「あれは誰だ」

男の名はブレット・カーマル。二十七歳。黒髪に黒い瞳で、一九
四センチの長身だ。スタイルは抜群である。そして神秘的な甘いマ
スクが印象的だ。百人中百人が目を見張るほど完成された美があり、
人間離れしている。それは俳優やモデル並みの容姿であるファウス
トやシギルさえ比較ならないほどだ。長めに伸ばした前髪をおろし、
やや目元を隠してあるのは、目立ちすぎるのを気にしている内面の
表れである。だがそれさえも、美しさに彩りを添える一品だ。

テーブルをはさんで寛いでいたサウスは一瞬、緊張した面持ちで
答えた。

「昨日入って来た少年です。シルバー・クラウド・ラインビル、十
五歳。筆記も実地も満点でした」

マニユアルどおりの言い方をしておいて、再びボンヤリとする。
さきほどからブレットにみとれていたので。

いかなる男女も、これは別物と言わしめるだけの気品と美貌。て
っぺんから爪先まで一点の曇りもない。もはや神懸かり的だ、と。
そんな彼の、次に目がいくのは制服である。軍服の上着丈は通常、
腿のあたりまでだが、彼の場合はスネまであり、色は瑠璃紺だ？？
それはすなわち將軍の証。グラウコスで將軍といえば、全七軍のト
ップに立つ者として知られている。つまり彼は將軍の將軍、大元帥
とか総帥とか言われたりする立場の人間なのである。

奔放な性格のサウスでも臆する相手だ。極度な緊張もする。しかしそれを押し下げて、たまに向かい合い雑談するのは、やはり一両千両以上の価値があるからだ。

サウスの説明を聞いて、ブレッドは顎をつまんだ。

「ああ、あいつか。なるほど。容姿自体も目立つが、行動も派手なヤツだ。なんでも苦勞せず、ひょうひょうとやってのけるタイプだな。誰かに似ている」

「あなたが言いますか」とサウスは思いつつ、受け答えた。

「ファウスト・ロスレイン」

即答だったので、ブレッドはわずかにサウスを凝視した。

「そうだ。まさしくファウスト・ロスレインだ。よく気がついたな？」

「そりゃ、わりと年中、一緒にいますから」

サウスの言葉に、ブレッドは穏やかな笑みを浮かべた。

「嫌か？」

「いえ、とんでもない。良き友であり、良い戦士だと思っています。まあ時々、劣等感はいだきますが」

「おまえのように優秀な男に劣等感をいだかせるとは、たいした男だ。すると、そんな人材がまた俺の手に入ったと考えていいのかな？」

「は、はい。そう考えてよろしいかと」

「そうか、しかし??」

ブレッドはテーブルに手をつき、立ち上がり際に言った。

「あの少年、要注意だな」

「えっ??」

サウスはブレッドの台詞を意外に思い、見上げた先に、將軍の顔を見た。

「思い過ぎならいいが、なんとなく、軍人の勘がそう言っている。優れた者は宝だが、扱い方を間違えると足をすくわれる。目を光らせておけ」

「……はい」

サウスは小さな声で返事をした。自分は別のことで目をつけていたのだが、まさか將軍から直々に軍事的な目付役を命ぜられるとは思ってもみなかったので、動揺した。

しかしそれからの一年は、シギルも連日のようにある初頭教育や訓練を受けていたので、忙しさにまぎれ、さして変わった様子もなく過ぎた。「やはり將軍の思い過ぎじゃないだろうか」と口には出さないが、サウスは思った。

シルバーは優秀さを鼻にかけないうえに温厚な性格で、同僚に好かれている。落ちこぼれ気味の仲間を助ける知恵も持っていて、それが決して出しゃばらない、さりげないフォローだったりするので、教官からも好評だ。間違っても人の足をすくうような人間ではなかった。

親友と呼べる友もできたようだ。同室のルーク・リース。訓練中でも休暇中でも常に一緒だ。なにか気が合うのだろう。サウスから見てその雰囲気は、まさにファウストと自分を見るようだった。

(それにしても)

サウスは腕組みをして、入隊当時より十センチほど背の伸びたシギルを、やや遠くから見つめた。シギルは一人で集団を離れ、休憩している。今日はルークとは訓練内容が別らしく、若干つまらなそうだ。

はじめは「ファウストに似ている」とみんなが噂していたが、意外と感情表現豊かで人当たりが良く、屈託なく笑う少年であることが判明した昨今では、誰も似ていると言わなくなった。ただサウスだけは未だに「ファウストをずうっと可愛くした感じだ」と言い張っている。

(客観的に見ると、やっぱり似てんだよな。どことなく顔立ちが。他人の空似とはよく言ったもんだ。まあどっちにしる、俺好みだからいいんだけどよ)

などと、くだらないことを思っていると、グラウコス基地の門をくぐった二台のジープが訓練場を横切った。ジープは本来ならそのまま外来専用の駐車場へ向かうはずだが、不意に後方のジープがシギルのそばで停まり、中から亜麻色の髪の中年男が跳び降りた。中年男はタートルダヴ基地の空軍所属、ロイス・ハーベイ伍長、四十歳である。

突然わきで停まり、ジープから降りて来た人物に、シギルは驚きと懐かしい喜びに、またたいた。

「ロイ？」

「まさか??まさか、こんなところで逢おうとは」

ロイスの顔にも、シギルと同様の感情が表れた。だがロイスは、おおげさに声を上げたりしなかった。少年の胸のプレートに、自分の知る名が刻まれていなかったからだ。

ロイス・ハーベイは、今でこそ軍隊で伍長などをやっているが、元GP創立者の一人である。もちろん軍に知られてはマズイ過去だ。さいわいGPメンバーである頃は「ロイ」という愛称でしか呼ばれておらず、顔もフルネームも公表されていなかったので、入隊することができた。

彼が軍に入ったのは、GPに愛想をつかしたからにほかならない。否、GP設立当初、彼の胸にはもつと高尚な目的があったのだが、現GPの総統スカイフィールズが現れて以降、思うようにいかなかったから反旗をひるがえした、というほうがより正しい。今では初期メンバーのほとんどがGPを抜け、散り散りになってしまっている。

「ロイ、元気だったんだね。うれしいよ」

シギルはまだ幼い子供のように、ロイスを見つめて微笑んだ。その笑顔でロイスはすぐに、シギルの心にわだかまる不安や淋しさに気がついた。なにしろ赤ん坊の頃から知っている少年だ。ロイスとしては、我が子を見守るような心境だった。

「君のことが、ずっと気にかかっていた。ひとときも忘れたことは

なかったよ」

ロイスは言い、懐から名刺を出した。

「なにか困ったことがあったら、ここへ連絡してくれ。なんでも力になろう」

渡された名刺にはメールアドレスと携帯番号が印刷されている。

シギルは素直につなずいた。

「ありがとう。ロイス……伍長？　すごいな、伍長なんだ」

「別に、大層なことはしていないんだがな。今日だって単なる上官のおともだ」

そう告げると同時くらいに、ジープの運転手から声がかかった。

「伍長、早く参りませんと」

「ああ、すまん」

ロイスは軽くふり返って答えた。

「それじゃあ……シルバー？　私は二日こちらにいる予定だ。また逢おう」

「うん」

頬を紅潮させ、心からうれしそうに返事をするシギルの顔に、ロ

イスは悲しみを隠した笑顔を返した。

（こんなに純粋な子がセフィラとは……　かわいそうに。運命とは残酷なものだ）

ロイスはジープに乗り込み、シギルに軽く手をふり、その場を去った。シギルも軽く手をふり返した。するとジープが巻き上げる土埃の向こう側から、サウスが歩いて来た。

「ロイス・ハーベイ伍長と知り合いか？」

シギルはややギョツとして、軍人らしい敬礼をした。

「はい。小さい頃、よく面倒をみてもらっていました」

「へえ」

顎をつまむサウスの顔を、シギルは眉をひそめて見つめた。ここ一年、見張られているとは感じていたものの、話しかけられるは初めてだったからだ。

少し緊張ぎみのシギルに、サウスは優しく微笑みかけた。

「どうだ？ 調子は。一ヶ月後には後輩が入ってくる。しっかりとないとな」

「はい。そうするつもりです」

「お、頼もしいな。おまえのように優秀な人間は、上官としても鼻が高い」

「ありがとうございます」

シギルは堅苦しく会釈する。「どうも、かなり距離を置かれていような」とサウスは頭をかいた。

「あーそのー、なんだ、もうどこに就くか考えてあるのか？」

「一応。第一希望が陸で、次が海です」

サウスは意外そうに目を丸めた。

「へえ？ 筆頭に我が隊を選んでもくれるとは、うれしいね。けど空は？ 興味ないのか？」

シギルは口を閉ざした。空にはファウストがいる、とは言えなかった。弟だと名乗り出られないことだけでも苦痛であるのに、そのうえ同じ隊で頻繁に姿を目にしなければならいなんて状況は、地獄としか言いようがない。

そんなシギルの気持ちなど知る由もないサウスは、急に黙り込んでしまったシギルを、どう扱えばいいのか迷った。

「えーっと、なにか、気に障ったかな？」

シギルはハツとし、うつむいた。

「いえ、別に。そろそろ休憩時間も終わりですので、失礼します」

一礼し、踵を返して同僚の群れの中へと戻るその後ろ姿を、サウスは呆然と見送った。

「失礼します、か。まいったな。もしかして俺、嫌われた？」

グラウコス空軍基地内の管制塔は東西南北、北東・南東・北西・南西の八方にそれぞれあり、すべてを直線で結んだ中心に管制塔本部が構えられている。こうした空港設備が含まれる分だけ、陸軍や海軍に比べ敷地面積は約三倍もある。だが軍事会議など、もろもろの事務的な作業をおこなう施設は陸軍と共同である。将軍がブレット・カーマルに代わってから、経費削減のため縮小されたのだ。

サウスはその日、情報処理室を訪れてファウストと出会った。設置されているパソコンは、何世代か前のEレシートディスプレイ型デスクトップで、ワイヤレス式のキーボードとマウスで操作する。サウスなどは、わりにアナログ人間なので、最新モデルより、こちらのほうが使い勝手が良いと思っている。

室内に入ると、整然と並ぶ複数台のパソコンのうち一台が、やや暗めの室内に煌煌とした明かりを灯していた。ファウストが一人、パソコンのディスプレイに映し出された個人情報のデータベースを虚ろに見つめている。

「よう、なにしてるんだ？」

サウスの軽い挨拶に、ファウストは表情なく、ふり返った。

「調べものだ」

「弟か？」

ディスプレイを覗き込みながら、サウスは声を落とした。ファウストは微かなため息のあと、うなずいた。

「ああ。だが、それらしいのはな」

「なんていうか、まあ、なに言っても仕方ないけど、あれだよな。大変だよな。俺で力になれることなら、なんでもやるぜ？」

「しおらしいことを言うな。気味が悪い」

ファウストは苦笑して、再び画面に向かった。サウスも一緒になつて、膨大な量のデータを上から下まで注意深く見てみたが、気に

かかる者はいない。

「俺が五歳の時だ。忘れられない」

不意にファウストが語りだした。左手をマウスに置いてはいるが、操作は止まっている。サウスは近くのイスを引き寄せて座った。

「弟はまだ生まれただけで、思えばあれが幸福の絶頂期だった。

弟の名を自分がつけてやりたいんだと、ずいぶん母にねだって、生まれる前から必死に考えて、用意していた名前をつけたんだ」

「へえ。そんな話、初めて聞いたな。なんてつけたんだ？」

「シギル??シギル・ロスレイン。いつも陽の当たる場所においてほしいと、願いを込めた」

「そっか、いい名前だな」

「だが現実には、願いとは裏腹だ。俺は二ヶ月も、一緒に暮らしたかどうか。街がテロの襲撃を受けて、俺の家にも爆弾が投げ込まれた。両親は即死。弟は居間に取り残された。その時は駆けつけた消防士に助けられたが、外で待っていた俺の手には渡されず、救急病院へ搬送された。あとを追って病院を訪れると看護師がやって来て、無傷だったから養護施設へまわされているはずだと言った。でも言われた施設にはいなかった。街中の病院、施設、預けられそうな場所は全部、捜した」

「いなかっただな」

ファウストは苦痛に顔をゆがませた。その胸の内にある怒りと哀しみを感じて、サウスはいたたまれない気持ちで一杯になった。世の中に、そんな理不尽があっただけいいはずはないと。

「……こんなことを言うのは無責任だと叱責されそうだけど、諦めずに捜し続ければ、きっといつか見つかる。出逢える時がくるって俺は思うぜ?」

言いながらファウストの肩を優しく、だが力強く叩く。その慰めは確かに無責任だと思いつつも、ファウストは得難い友のいることに感謝した。

「ああ、そっだな」

わずかに笑みを浮かべたファウストを見て安心したサウスは、腕組みをして眉をしかめ、声のトーンを上げた。

「しっかし妙だな」

「なにが？」

唐突な態度に、ファウストはやや肩を引いた。するとサウスは人の顔を指さして言った。

「だっておまえ、ガキの頃からずっと捜しているんだろ？」

「ああ」

「軍人になってから捜し始めたとしても、もう七年経っている。今現在十六歳前後のシーランの男の子っていうのを限定で捜して、いまだに見つからないなんて、ちょっと不思議だ」

「そんなことは、おまえに指摘されなくても俺だって感じている。でもだからって、どうすればいい」

「うーん」

サウスは頭をかき、しばらく宙に目を泳がせた。最悪、生きてはいないのかも知れないと思うが、希望を捨てていないファウストの前にそんなことは言えない。あくまでも、どこかで生きていると想定して考えるしかないのだ。

首をひねったサウスは、ふと、

「お、こういうのはどうだ？」

と指を鳴らした。

「シーランだけど、戸籍上はシーランとして暮らしていない」

ファウストは怪訝そうにサウスを見据えた。

「……それは、ちらっと考えたこともあるが、少し無茶苦茶じゃないか？ 乱暴すぎる」

「でも搜索範囲は広がる。段階は見た目じゃ判別しにくい。本人か、もしくは育ての親だが、ネオ・ゲノムならネオ・ゲノムと申告すれば、そのまま受理されるだろ？ よほどのことがないかぎり医学的な実証を求められもしないし、書類上の書き換えなんかどうにもなる」

「しかし」

「ここまで捜していないんだ。手当たりしだい捜してみたって、無駄にやあならないだろ」

「おまえな」

たたみかけてくるサウスに、ファウストは沈痛な面持ちだった。

「万が一にもそうだとしよう。それで？ それらしいのを手当たりしだい血液検査するのか。人権侵害で訴えられるぞ」

サウスは一瞬ひるみ、気弱に顔を上げた。

「訴訟はマズイな。立場上、非常に良くない。でも、それだけの価値があるかもしれない。俺は一度でいいから、おまえが本気で笑っている顔を見てみたいんだよ、ファウスト」

「俺はそんなに笑わないか？」

サウスは腕を広げて肩をすくめた。

「笑わないね」

深いため息が、二人のあいだで交わされた。

それから一ヶ月。基地は新入隊員を迎え、かつての新入隊員は第一志望、もしくは第二志望の隊へ上がる季節を迎えた。希望は毎年成績順に優先して叶えられる。シギルは一度も成績を落とすことなってきたので行く先は決まったのも同然だ。

改めて一軍人となる者も、新しい仲間を迎える側も、この時ばかりは浮き足立って、総本部前の広場にある電子掲示板に配属先が映し出されるのを待った。だが今年は何年とは違った。掲示板の前の人だからには、不審などよめきが上がった。誰よりそこにいて愕然としたのは、シギルだ。ほとんどの者が希望通りの隊に選ばれ、みな二等兵であるのに対し、彼だけが希望を叶えられず、欄外に名を記されたのだ。

『次の者には以下の任務を命ずる』

空軍伍長

シルバー・クラウド・ラインビル』

シギルは、めまいがした。

（空軍伍長？ なにそれ。せめて上等兵にならないのかな？？いや、そんな問題じゃないか）

気軽にふらふらと見学してきたサウスも、これには我が目を疑った。

（おいおい、うちの將軍は、なに考えてるんだ）

思いつきり飛び級出世したサウスやファウストでさえ、新入隊員からいきなり下士官にはなれなかった。どんなに優秀であろうと、まずは二等兵、上等兵ときて下士官だ。

「おい、シルバー」

サウスは、青ざめて呆然としているシギルを見つけ、声をかけた。シギルは気がつかなかった。一年経っても、どこかその名に馴染めないでいたのだ。

「シルバー」

二度目でハツとしたシギルは、泣きそうな顔でサウスを見た。サウスは驚きと同時にたまらない気持ちになって、反射的にシギルの腕をつかむと、そのまま群衆から抜け、建物の中へと入っていった。

無人の休憩所で、サウスは暗い顔をしたシギルと向かい合い、座った。

（さて、どうしたものかな）

サウスがほとほと困っていると、シギルのほうから口火を切った。

「俺、將軍に嫌われているんでしょうか」

「えー！？ なんで」

「だって、第一希望でも第二希望でもない空で、しかもいきなり伍長だなんて。潰してやるうって腹でもないかぎり、考えられない選択です」

（なーっ！？ なんつーマイナス思考！）

サウスは心の中で叫び、額に冷や汗をかいた。

「ま、まさか。いくらなんでも、そりゃないぜ。俺の知るかぎり、將軍はそんなことをするような男じゃない。きつとおまえが優秀なんで期待してるんだ。第一、よく考えてみる。ラッキーじゃないか。いきなり出世コースだなんて」

するとシギルはギロリとサウスを睨んだ。

「他人事だと思って。別に俺も、出世コースが嫌だとは言いません。でも空だけは嫌だったんです」

「どうして？」

ひどく合点がいかないように問われ、シギルはムツとした。

「希望どおりの隊へ入れた人に、俺の気持ちなんか、わかりませんよね」

「あ、あのなー」

サウスはガツクリとし、頭をかかえた。

「俺は力になるうとしてるんだ、これでも。場合によっちゃ將軍に掛け合ってもいいと思っただな」

「そんな、理由なんて言ったら、ますますダメだ。申し訳ありませんが丁重にお断りします」

サウスは若干興味をそられて、そっけないシギルを熱く見つめた。

「気になるなー、その言い方。いったい全体、空のどこが気に入らないんだ。たいていの人間が憧れてる。今は太古の昔と違って、身長、体重にこだわらず、実力さえありゃ戦闘機に乗れる。Gの負担がかからないシステムだからな。まさか高所恐怖症ってわけでもないだろう」

シギルは、にがい表情を浮かべた。彼は高所恐怖症どころか、身ひとつで大気圏すれすれを飛行できる。いまさら戦闘機に乗って飛んでみたいとかいうレベルではないのだ。

「俺は空に憧れを持っていませんし、戦闘機にも乗りたくありません。嫌だという理由がたとえもつともでも、大佐に打ち明ける気も

ありません。このことについて触れてまわられても困ります。所属するのは嫌ですが、それ自体が嫌いだというんじゃありませんから」「なんだそれ」

納得いかないというより訳がわからないといったふうのサウスを置いて、シギルはスツと立ってイスを離れた。

「とにかく、決められたものは仕方ありません。したがいます」

「お、おい」

サウスは腕をのばしたが、去っていくシギルを追うにはおよばなかった。少年を追うよりも將軍のもとへ行つて、今回の人事に対する真意を聞き出すほうが先決だと思われたからだ。

將軍室は四室に分かれていて、外部からの入口は第一室の報告室にのみある。残り三室は書斎、応接室、寝室となっていて、報告室からのみ出入り可能だ。

サウスが報告室の、銀色で重厚な金属製の自動ドアを開くと、奥のデスクに組んだ両足をかけ、イスの背もたれにふんぞり返っている若き將軍の姿が目に入った。偉そうというのではなく、単にくつろいでいるふうの彼は、プライベートビーチへ遊びに来たどこぞの皇太子さながら、優雅に見える。

サウスは無言で近寄り、静かに立ち止まった。

「將軍、いったい、どういふつもりです？」

問われたブレッドは、彼が来ることを予想していたように、ニッと笑った。

「おまえもご苦労なことだな、サウス。そのお人好しがいつか、首を絞めることにならなきゃいいが」

「質問に答えてください」

本当のところ、ひどく緊張していたが、サウスは平静をよそおって言った。ブレッドはデスクから足をおろし、黒い瞳を光らせた。

「あれは稀にみる逸材だ。即戦力になる。おまえの報告によると人柄も問題はないんだろ。それなら、さっさと士官クラスに上げてしまったほうが得策だ。鉄は熱いうちに打てと言っただろ？俺たちは将来的に絶対と言っている確率で、GPと存続をかけて戦う。それはイコール、セフィラ戦だ。能力のある者はすぐにでも使えるようにしておきたい。しかし残念ながら陸も海も伍長の空きがない。かといって下級軍曹サージェントより上にすえるのは、いくらなんでも早過ぎる。よって空軍伍長に任命したと言っただろ。なにか疑問でも？」

「つい昨日まで新入隊員だったんですよ？下を引つ張っていけるだけの力があるとは思えません」

「見込み違いなら降格させればいいだけだ。そう固く考えるな」

「本人が納得していません」

「では、本人に直接ここへ来るように言え。納得いくまで説明してやる」

サウスはいつとき言葉を失って、口を開閉させた。

「かわいそうじゃないですか。俺でさえ、ここへ来るのは勇気がいらいます」

やっと返ってきたような台詞に、ブレットはふと立ち上がった。サウスへ歩み寄った。背は高いほうであるサウスでも見上げるような長身で、その若さからは想像もつかないような功の仮面をかぶっている。おまけに、人間が想像しうる範囲を越えた美貌の持ち主だ。そんな見るからに近寄りがたい男が、一步踏み込まなくとも届く位置で意地が悪そうに笑った。後ろ手を組み、少しだけ上半身をかたむけ、耳元でささやく。

「同伴で来てやればいいじゃないか。特別に許可をやるう」

(! % # & @)

サウスは目を白黒させつつ、あとずさりした。

ブレット・カーマルは、ほかの基地の将軍に比べれば、歳も近く親しみやすいタイプなのだが、平和への理想や人格者としての思想が高い分、人に求めるものも厳しい。特に軍人となった者には「相

応の覚悟を持ち、おのれの良心に忠義を尽くせ」と日頃から口うるさい。軍はじまって以来の名将軍とうたわれるだけあって、兵士のしつけは完璧だ。それは彼の尊敬すべき点ではあるが、時にこの強靱な潔癖さが多く権力がらみの敵を作ることもある。

それにも関わらず、最大規模を誇るグラウコス基地に君臨し、地位をたもって一見平然と暮らしていられるのは、そこらの人間では歯が立たない相手だからだ。その男が「あくまでも筋の通った人事」としていることに不服申立するのは、進んで地獄の扉を開けると同じと言える。「同伴なんて冗談じゃない」と、サウスは身震いした。

「わかった、わかりました！ もう、どうなっても知りませんよ！」
ブレッドはスツと胸を張った。

「結構。人事で一度や二度失敗したからといって、どうにかなる俺ではない」

やや低音の、張りのある声で断言をする。

(その自信はどこから来るんだ)

サウスは思ったが、おっかないので口には出さなかった。そして、

「では、ご成功をお祈りします。失礼いたしました」

と敬礼して踵を返し、鬼のような早足で退室した。

シギルはロイス宛にメールを打っていた。読んだらすぐ消去する
ようにと、あとがきを添えて。

『空軍の伍長に就任した。異例なことらしいので、みんな驚いてい
る。俺自身、うまくやれるかどうか不安だ。なにより大佐の顔をま
ともには見られないだろうという気持ちがある。ここへ来る前に博
士が、俺に兄がいると教えてくれた。ファウスト・ロスレインだ。
ロイスは知っていた？ 今すぐにでもここを飛び出したい心境だけ
当てはないし、よそで身を隠すのは限界がある。GPからは逃げて
きただけなんだ。博士がどうしているかも心配だ。良ければ一度会
いに来てほしい』

自室でメールを受け取り読み終えたロイスは、「会いに行く」と
だけ返事して、シギルのメールとともに返信履歴を消去した。その
あと肩を落とし、頭をかかえてベッドに腰をおろすと、大きなため
息をついた。

「なんてことだ。あのファウスト・ロスレインがシギルの??運命
のイタズラとしか思えんな」

ロイスは因縁に恐怖しつつも、翌々日に控えたシギルの就任式の
ため、すばやく行動を起こした。休暇をとり、グラウコス基地に出
席の希望を申し立て、宿泊施設に予約を入れたのだ。

もちろん上官からは嫌味を言われた。ロイスの所属するタートル
ダヴ基地でも就任式はあるのだ。グラウコスの就任式に行くとい
うことは、すなわち、タートルダヴの就任式には出ないということだ。
いい顔をしてもらえないのは当然である。

しかしロイスは決して臆することなく、なんども頭を下げて懇願
した。彼は彼なりにシギルへの罪悪感があり、また愛情を持ってい
たので、そうすることが苦ではなかった。

ラウ・コード博士の近況についても調べあげた。GP研究室爆発

事故の報道があつてから、今日に至るまでの、軍が入手し得た情報のすべてだ。

「研究所の爆発は何者かの襲撃によって引き起こされた事故である可能性が高い。軍ではテロリスト同士の抗争とみている。事故による火災でセフィラに関する研究データがほぼ消失。当日の被験者の在、不在は未確認。死亡説もささやかれているが、G P側が流したデマだろうと推測される。ラウ・コード博士はかろうじて脱出し、現在はG P本部に身を置いているものと思われる、か」

ロイスは眉をひそめた。

（シギルがグラウコス基地において、偽名でなんの問題もなく過ごし、そのうえ士官クラス入りを果たしたとなると、そこにはかなり信用のおける架空の戸籍が存在するはずだ。これは考えるまでもなく博士の根回しだろう。とすると爆発事故は抗争などではなく、博士がシギルを逃すために仕組んだものと推測するのが自然だな。本人も「逃げて来た」と言っている。??なんにしても、潜伏先にグラウコスを選んだのは正解だ。あそこの將軍はたぶん一番まともだからな。全軍のトップに立ち、権力も実力も充分に兼ね備えていながら、やっていることは、ほとんどボランティア活動……めずらしい男だ）

ロイスはおぼろげに、ブレッドの面影を思い浮かべた。たぐい稀なる美貌の人で、貧民街のストリート・チルドレンから軍人になつたということぐらいしか、彼に関する知識は持っていない。数多くの武勲も立てているが、ことにボランティア活動には熱心だ。考えれば考えるほど、得体の知れない奇特な人間としか表現しようのないことに気づく。

そしてふと「ラウ博士は生きているのだろうか」という不吉な疑問を、胸の内つぶやいた。こんな真似をして、あのスカイフィールズにバレていないとは、どうしても信じられないのだ。

（もし万が一、ラウ博士がこの世にもういないとしたら？ とてもじゃないがシギルの耳には入れられない。実の父のように慕ってい

たんだ。そんなことになったら、きつと精神のバランスを崩してしまつたろう。百二十パーセントの正確さを誇る制御力をもつてしても、精神のおよぼす影響力は計り知れない。ひとたびバランスを失えば、きつと力を抑制しきれなくなる。とはいえ、いつまでも隠しきれぬものではないだろうな。大佐がストツパーになればいいが、苦悩の色をにじませて、ロイスは窓に映る自分の顔を見つめた。「命を懸けるか。おまえに、その覚悟はあるのか、ロイス・ハーベイ」

自問し、目を伏せる。彼は答えを出せないまま、翌朝、グラウコス基地へと旅立つた。

空軍伍長に任命されたシギルは、士官棟に案内された。案内人は、なぜかサウスだ。

「地下の移動装置を使えば、陸海空、すべての士官棟に移動可能だ。記章とネームバッヂさえつけてりゃ許可はいらない」

これからシギルの生活の拠点となる空軍の士官棟は南側に位置している。何層にも重ねた核シェルターの地下一階にあり、高級ホテル並みの広さと美しさ、そして設備が整っている。地下二階にはモノレールの原理を採用した水平移動のエレベーターが西側と東側のびており、そこから陸海の士官棟へとそれぞれ移動できるのだ。距離にすれば遠いが、これを使えば五分で行き来できる。

「質問いいですか？」

「ん、なんでも聞いちゃって」

「どうして大佐が自分の案内を？」

「それはね、俺から將軍にお願ひしたからだよ」

サウスは、のんきな声でニヤニヤしながら答えた。シギルは不審そうに、その顔を覗き込んだ。

「どうして」

「あれ、つれないな。一年前に告白したの、忘れちゃったの？
哀しいなあ」

「ふざけていただけじゃ」

「ないよ。俺はいつでも本気さあ」

とても本気とは思えない軽い口調だが、たぶん本気なんだろうと、シギルは沈痛な面持ちで眉間を寄せた。

「大佐とお付き合いをして、なにかいいことありますか」

「お、いい質問だな。もちろんあるさ。伊達に陸軍大佐を務めちゃいない。おまえの権限がおよばないところもフォローできるし、なにかあってもバックアップできる。一応、あっちにも自信があるぜ？」

「……」

「どう？ 付き合う気になった？」

「いや、聞いてみただけですから。まったくその気はありません」

「んなーっ！ 冷たいっ。冷たすぎるぜ、ベイビー！」

周囲のことなどお構いなしにサウスが絶叫するので、部屋で休んでいた一人の士官が通路に出てきた。

「んだよ、サウスか。うつせーぞ！」

空軍少将のデイモンズ・バーンである。寝癖だらけの赤毛に黒目で、身長は一七八センチ。容姿は可もなく不可もない。三十二歳独身だ。いつも無精髭を生やしている。ファウストほどの活躍はないが、指導力を買われて少将の地位にある。が、本人曰く「ファウストを早く上げる。奴の上に立つのは向いてねえ」とのこと。

所属が違うとはいえ、彼はサウスの上司でもある。しかしサウスは思い切りタメ口を叩いた。

「こらえろ！ 俺は今、とおっても傷心ボーイなんだよお」

グラウコスの鷹と恐れられているファウストと平気で親友付き合いしている男だ。上司だろうがなんだろうがお構いなし。上下関係という言葉をまったく無視して生きている。怖い者知らずの子供のようであり、生まれつき無礼者とも言える。そんなサウスが敬意を

払うのは、カールマル將軍だけだ。それを知ってはいても、デモンズにもプライドがある。おまけに睡眠をさまたげられているので、軽くキレた。

「ああっ!? てめ、頭打ったか!」

初日から問題を起こしたくないシギルは、慌ててサウスを制した。
「大佐!」

これを見たデモンズは声を上げ、シギルを指差した。

「あーっ、おまえはっ、噂のニューフェイスだな! よく来た! 空へようこそ!」

すると少将の声に反応して、ほかの士官たちも次々と部屋から顔を覗かせた。

「なにっ、ラインビル?」

「おーっ、来たか。どれどれ」

「よーお。空へようこそ!」

「空へようこそ!」

みな満面の笑顔。

シギル・ロスレイン、もとい、シルバー・クラウド・ラインビル十六歳は、本人が思うよりも友好的に迎え入れられたことに驚いた。そして、和気あいあいとしたムードにやや圧倒されつつも、頬をわずかに紅潮させ、照れくさそうに一礼した。

「よろしく願います」

「あれは、なかなかカワイイな。女性陣に大人気なのは勿論だが、士官のウケも上々だ」

人が混み合っている就任式会場の広場で、ルーヴ・サーヴァル・メイレン空軍中佐を相手に、シギルを指してデモンズは言った。すると東洋系の切れ長の目をわずかにまたたかせ、メイレンは釈然としなない面持ちでまっすぐ前を見据えた。

「カワイイですかね？ 自分には脅威です」

「ん？ そうか？」

「そうですね。ロスレイン大佐を思わせるような優秀さに加えて、前代未聞の最年少士官。明日にでも自分の上官になりそうな勢いだ。怖いですね」

「はっはっは。そりゃ考えすぎだ。たとえばいつか上官になる日が訪れるにしても、五、六年は先だろう」

「明日も五年も同じです。ロスレイン大佐が大将になる頃は彼が中将だと、みんなが噂しているのをご存知ですか」

「ほう、初耳だ」

「自分は情けないです」

「なんだ、くやしいのか」

「もちろんです。入隊当初から大佐について行こうと決めて、死ぬような努力を重ね、やっとここまで来たんですよ？」

「努力でどうにかなったんだから、たいしたものだ。奴がおまえを必要としていることに変わりはないから。別にそんなピツタリくっついてかなくてもいいじゃないか」

「自分は片腕になりたいんです」

「ふうん、奴も好かれたものだな」

デイモンズは人差し指で鼻をかきつつ、遠目にファウストの姿を眺めた。

一方、シギルは昨日まで同室だった三人の仲間達に取り囲まれ、祝福されていた。ひとつ年下のラスクは海軍に、同い年のゾイツクとひとつ上のルークは陸軍に入った。みんな真新しい深緑の制服に身を包んでいる。

シギルは「自分もその制服を着てみたかったな」と思ったが、言わなかった。エリートコースに進んだ者が口にする嫌味になるとわかってからだ。だが「みんなと同じ」であることに憧れていた少年にとってそれは、やはり妬ましいことだった。

「せめてセフィラでなかったら」と思ってしまったのだ。

シーランがセフィラになるには、数億万分の一のシーランしか保有していないという覚醒遺伝子「ナノクロス」が必要だ。しかしこのナノクロスは生後五年間が経過すると自然消滅してしまう。つまり、五歳の誕生日を迎えるまでにナノクロスがテレキネシス遺伝子「セフィラ」にショックを与えなければ、セフィラにはならないということだ。

また覚醒しても、衝撃に耐えられない個体は死んでしまう。よって、すべての条件をクリアした完全体は非常にめずらしい。皆無と言っても過言ではないだろう。シギルは、そんなものになってしまった身の上、時々ひどく憎らしく思えるのだ。

「いいなあ、黒い制服。よく似合っているよ。かっこいい」

ゾイツクは、生地も仕立ても良く、見た目も高級感があるデザイナの士官服を、心底うらやましがって褒めた。着ている本人が気に入っているかいないかは、このさい関係ない。

「ありがとう」

「士官棟って個室なのか？」

ルークが尋ねた。

「うん」

「俺たちは三人部屋だぜ」

「へえ、どんな感じ？」

「うーん、四人から三人になっただけでも少し広いんだけどさ。なんて言うか、あまり代わり映えしないよ」

「そうなんだ」

そう答えた時、開会式の鐘がなった。四人は別れ、それぞれの立ち位置へと散らばる。シギルはその途中でロイスに会った。というより腕をつかまれ、引き止められた。

「ロイ！」

まさか就任式に来るとは思っていなかったらしく、目を丸めて自分をみつめるシギルに、ロイスは優しく微笑みかけた。

「まずは、おめでとう。同じ空軍伍長だ。わからないことは遠慮なく聞いてくれ」

シギルは、うれしそうに瞳を輝かせた。

「ありがとう」

「また後で話そう。さ、早く位置について」

「うん」

手をふって去るシギルを、目を細めて見送ったロイスは、広場の前面に設置された大きなステージに各士官の顔ぶれがそろいつつあるのを眺めた。右手に海軍、中央に陸軍、そして左手に空軍士官の席が用意されている。ロイスはその中にファウスト・ロスレインを見つけて、ハツとした。

(まずい、よく似ている)

まだ幼さを残している内はいいが、成長とともに兄に似てくるのではないかと危惧していた彼は、こめかみにひと筋の汗を伝わせた。鉄のようにクールなイメージの強いファウストに比べ、シギルは春の日差しのように温和で愛想がいい。一見まったく正反対だからいいようなものの、これが同じタイプだったら……と考えて、ロイスはぞつとした。

そのロイスの肩を、後ろから誰かが軽く叩いた。ふり返ると、サウス・ウィビーン陸軍大佐の顔があった。

「ハーベイ伍長もどうぞステージ側からご参加ください」

ロイスは慌てて敬礼した。

「いえ、自分は勝手に参加を申し出た身であります。許可をいただけただけでも感謝しております。お気づかないく」

「んな遠慮するなって。シルバーの晴れ姿、見に来たんたる？ せっかくなんだから特等席で見なきゃ」

ニツと笑うサウスを、ロイスは目をしばたかせて見つめた。

「あの、あの子になにか言っていましたか」

「ああ、小さい頃、世話になったって」

「そ、そうですか」

ロイスは頭に手をあてつつ、恐縮しながらサウスに先導され、ステージの席へと着いた。就任式は、おごそかな中にも華やかで楽しい雰囲気を漂わせながら、つつがなく進行していった。將軍のスピーチがあり、記章の授与式に移る。

新入隊員であった者は、所属ごとの記章と、まだ訓練生であることを示す赤いピンバッチを受け取り、シギルは空軍の記章と伍長の記章を受け取った。今回、士官クラスで移動があったのはシギルだけなので、その注目度は高く、少年にはかなりのプレッシャーだろうと思われる。

ロイスは、シギルが就任の挨拶をする場面で思わず泣けてきてしまい、ハンカチを取り出して涙をぬぐった。

（シギル、君の運命は過酷だ。たとえ今は軍人として人並みに生きられたとしても、セフィラという名を背負い続けるかぎり、永遠に平穏な日々が訪れることはない。だが私は知っている。君が誰よりも平和を望んでいることを。君の心がどんなに純粹であるかを。私はひどい男だな。セフィラが君であることを、心のどこかで良かったと思っている。君ならその力を人間の恐怖に変えないと……私は君の幸福よりも、地上に生きる自分の身を案じている）

隣に着席していたグラウコスの空軍曹シリング・カーター（三十六歳）が、ロイスの背を軽く叩いた。感涙しているロイスを気づかすて慰めたのだ。シリングに、ロイスの涙に隠された本当の意味を探ることはできない。だが彼の手は、今のロイスには有り難かった。

わざわざ自分が所属している基地の就任式を蹴ってまでやって来て、シギルの就任挨拶に涙したロイスは、グラウコスでちょっとした話題になった。

「ラインビル伍長は、いろんな人間に愛されているようだな」

基地内のカフェテラスで一服しながら、ファウストは親友のサウスに向かって他人事のように話しかけた。

「カワイイからな」

受け答えるサウスものんきである。

「いや、それはおまえの見解だろう。俺は一般的な意見を聞きたいんだ」

「えーっ、だって、おまえんとこの少将もカワイイって言ってたぜ？」

コーヒーをかき混ぜていたスプーンの先を向け、サウスは声を上げた。が、

「少将が言うカワイイと、おまえの言うカワイイとは違うだろう」と言われると、とたんに覇気をなくして再びカップにスプーンを突っ込み、かき回した。

「まあな」

「あのロイス・ハーベイ伍長というのは、ラインビルのなんだ」

「さあ。昔なじみとしか聞いてないな。小さい頃、世話してたって」

「そういえば、ラインビルは孤児だったな」

「ああ。早くに両親を亡くしている。かわいそうだな」

「今時めずらしくない。おまえにかわいそうだと言われるほうが、かわいそうだ」

「この野郎」

口の減らない友人に悪態をついてやろうとした時、サウスはふと、視界の端にシギルの姿をとめた。彼は唐突に立ち上がり、大きく手

をふった。

「おい！ シルバー！」

シギルが気づいて、こちらに進行方向を変えたのを確認すると、サウスはイスに腰かけなおして、にやにや笑った。

「噂をすれば、だな」

サウスと向かい合っていたファウストは、なにげにゆっくりと、かえりみた。すると、こちらへ向かって来つつあったシギルの足が不意に止まり、急に背を向けて走り出したので、険しく眉をしかめた。

「おい、逃げたぞ？」

「えっ！？」

サウスはテーブルに手をつき、イスをならして立ち上がった。

「な、なんで？」

「知るか」

？明らかに自分を見て逃げた？？？そう感じたファウストは姿勢を戻すと、コーヒーをいっきに飲み干した。

「おい、サウス」

「あ？」

「あとでひっ捕まえて、なんで逃げたのか聞いておけ」

「お？」

ご立腹の様子と見て、サウスは驚いた。

（こんなことで怒るなんて、らしくねーな。さすがのファウスト様も人気者に嫌われるのはイヤなのかねえ……はは、まさかね）

サウスと別れたファウストは、その足でマチルダとの待ち合わせ場所へ行った。軍のレジャー施設内にある広い公園だ。人工的だが涼しげな木々が立ち並び、美しい園だ。日々軍事にたずさわる者が心の安らぎを求める、憩いの場である。

ファウストとマチルダは、その一角の人目につかないベンチへ腰かけた。付き合い始めて一年が経った。次の休日には彼女の両親と

挨拶を交わし、食事をする予定で、今日はその打ち合わせといったところだ。

「こういうことでもない基地の外に出ることはないから、思いっきり楽しめる場所がいいわ」

とマチルダは言うが、ファウストは乗り気でない。

「大事な挨拶なんだし、相応の場所つてもものがあるだろう」

「父は、私の好きなところでいいって言ってくれたわ」

「そうかも知れないが、俺の体面も考えてくれ」

「固いのね」

「そういう問題じゃない。心証を良くしたいんだ。特に君の父親は、所属が違うとはいえ上司でトップだ。内でも外でも、こっちは常に評価される側だ」

マチルダは頬に手をあて、うーんと唸った。

「まあ、それもそうだけど、あなたって優秀でしょ？ これといった欠点もないし、むしろ長所しか見えないのよね。あんまり完璧より少し崩したほうがいいんじゃないかしら。そのほうが人間らしいわ」

ファウストはしばらく無言でマチルダをみつめた。

「俺は人間らしくないか？」

「あら、やだ。悪い意味にとらないでね。ただ打ち解けやすくしたいのよ。これでも私、あなたに気をつかってないわけじゃないのよ」
ファウストは肩で軽く息をついて微笑んだ。

「わかった。君の好きな場所でもいいよ」

それを受けて、マチルダも微笑んだ。

「ありがとう。でも、うれしいわ。あなたが私の両親に良く思われたいって思ってたわ」

「当然じゃないか。俺は君を愛してる」

「私もあなたを愛してるわ」

二人は自然と包容を交わし、キスをした。幸福を感じる脳裏でファウストは、これまで逃れることのできなかつた弟の影をほんの一

瞬だけ忘れた。そのことが後から悲しく思えて、夜も眠れないほど苦しんだ。

翌日のこと。サウスは友人の注文どおり、空軍士官棟内のミーティングルームでシギルを捕まえた。

「おまえ、なんであそこで逃げるの？ ファウスト怒ってたぜ？」
捕まえた理由を告げるとシギルは青ざめた。

「えっ、怒ってた？」

「ああ。だって、ファウストの顔見て逃げただろ」

「すみません。つい条件反射で」

「は？」

「俺、あの人、どうも怖くて」

口ではそう言いつつ、シギルは「しまったなあ」と胸の内ですぶやいた。本当は逃げるつもりなどなかったが、隠していることへのうしろめたさや、兄を慕う心のはやりに負けて、逃げてしまったのだ。

サウスは呆気にとられて、シギルの胸元を指差した。

「もしかして、空に行きたくないっつってたの、ファウストが怖いから？」

シギルは素直にうなずいた。すると数秒の沈黙のあとに、サウスが「ぷっ」と吹き出した。

「わっはっはっ！」

「なっ、なにがおかしいんですか！」

「ひいーひっひっ。だってよー、なんかツボにハマりすぎてんだよっ。あっはっはっ。ファウストが怖いから嫌、か。すっげえカワイイっ。いかすよ、その理由！ 稀代の優等生が、ファウスト怖いっってか。高所恐怖症ならぬファウスト恐怖症？ あー、もうダメだ。おまえに逃げられた時のファウストの顔、思い出しちまった。ぎゃ

「ははははは！」

涙を浮かべてまで笑うサウスを前に、シギルは耳まで真っ赤にして顔をほてらせた。

「もう！ いいかげんにしてください。言わなきゃよかった。笑うな！」

「ぎゃあっはっはっはっはー……ああ、でもよお、ファウストの友人としてフォローすっけど、あいつが怖えのは仕事ん時だけ。本当は優しい、いい奴なんだ。みんな、ちょっと誤解してるけど。まあ、俺が言ってもピンとこないだろうけどな。一緒に仕事してりゃあ、おまえもいつか分かる時がくるよ」

シギルはあえて何も返さなかったが、彼のフォローを心密かに喜んだ。自分にとっては若干迷惑な男だが、兄にとっては確かにかけがえのない友人だと……二人のめぐり合わせを、ひとまず神に感謝しておこうと思った。

ところで、このエピソードは即基地内に広まって、『シルバーってやっぱりカワイイね事件』と名付けられた。もちろん名付け親はサウスだ。しかしこの噂話を聞いて、二人だけ笑わなかった人物がいた。当人のファウストと、ブレット・カーマル将軍である。

ブレット曰く、

「空に行きたくない理由としては、むしろ出来すぎている」

だが本格的に今期の訓練が始まってしまうと、怖いだとかなんだとか言っではいられない。所属が同じ士官同士は否が応でも顔を合わせなければならぬ。事件の噂のおかげでファウストは目も合わせないが、シギルは姿を見かけるだけで、悲哀に押しつぶされそうだった。

就任式後、休日をはさんで、明くる訓練初日。

空軍管轄訓練場内では、士官指導のもと、新しく配属されてきた二等兵の飛行訓練がおこなわれることになった。「士官クラスの方が主エンジンを操作。訓練生を乗せて飛び、実際の飛行を体験させる」という実地訓練だ。

シギルは下士官だが、戦闘機に乗ったことはないので、訓練生に混ざる。

「君の訓練は私が受け持つよ」

とシリング・カーター軍曹が言った。

黒々とした短髪。奥二重の黒い瞳は垂れ目で、どこから見ても優しそうなおじさんという印象の軍曹だ。

シギルは頭を下げた。

「よろしく願います」

訓練生は担当してもらおう各士官の前に整列し、小型通信機を耳に装着した。管制塔からの指示や、士官の指示を聞き取るためだ。

「君たちは乗っているだけだから気楽にね。といっても、少しは操縦テクニクを盗んでもらわないと困るんだけど」

二十八歳の女性士官シエラ・ハーネスト空軍准尉が冗談めかして言うと、緊張していた訓練生の顔に少し笑みがこぼれた。物腰の柔らかさは女性ならではの。場を和らげる言葉選びに関しても慣れていくようである。

ひと通りの説明が終わると、みなは機へ順に乗り込み、次々と離陸した。シギルも同様にして指導士官のとなりに乗り込むと、気を引き締めた。

「空を飛ぶのは初めて？」

シリングがなにか、そんな質問をした。ある意味、初めてであるはずがないシギルだが、そこはうなずいた。

「楽しいぞ、空は」

シリングの励ましが聞こえたかと思うと同時に、戦闘機は走り出した。順調に離陸。決められたコースをたどり、あとは着陸するだけだ。正味十五分の飛行。

が、急にシリングが、やや緊迫した面持ちで通信機のボタンに手を伸ばした。

「F305号機、主エンジンの操縦レバーに警告ランプが点滅。管制塔に指示を仰ぐ」

？こちら管制塔、操縦可能な方位を示してください？

シリングはゆっくりとレバーを動かしていったが、中位置で止めて、再び管制塔に指示をあおいだ。

「全方向、操縦不能。オートシステム反応なし。予備は異常なし」
？緊急用オートシステムにパスコードを入力して下さい？

シリングは指示にしたがって、反応のないオートシステムを切り捨て、緊急用のシステムを起動させた。これがうまく作動すれば、機は練習コースを自動で飛行し、着陸まで完璧におこなってくれる。訓練機ではなく、となりに座っているのが初搭乗の訓練生でなければ、副操縦桿を動かすところだが、まるで条件を備えてないので、やむを得ない。

シリングはシギルと目を合わせると、かすかに口角を上げた。不安にさせまいと無理に笑顔を作っているようだ。

「こんなことは、めったにないんだがな」

と言いながら、黄色いボタンを押す。

「緊急用システム、正常に作動。加速装置にエラーのサインが表示されている」

？加速装置ですか？ 着陸後、ただちに整備班を向かわせますか？
「了解」

管制塔とのやり取りが終了すると、シリングはホッとして座席に身を預けた。が、それまで様子をうかがっていたシギルが、ふとシリングの袖をつかんだ。

「軍曹、スピードが上がっています」

「なに!？」

メーターを見たシリングは、顔面を硬直させた。一秒に〇・五キロ加速している。前方を見ると、前に飛び立った機が迫っていた。

シギルはとつさに叫んだ。

「サブに切り替えます!」

サブとは副操縦員のこと、この場合、メインの操縦を完全に副操縦に切り替え、操縦士がシギルに移ることを意味している。さきほどシリングがあえて避けた手段だ。当然シギルには操縦経験などないが、そんなことを言っている場合ではない。

シギルは素早くサブに切り替えると、操縦桿を握った。それと同時に十メートル前方に迫っていた前号機を避け、その横わずか三メートルの距離をかすめて通り過ぎた。この瞬間を、管制塔員や地上に待機していた者は、固唾をのんで見守っていた。ヒツと息をつまらせた者もいる。

その一分も経たぬ間に、速度は人間の動体視力限界の値を示した。コースを行くすべての機が、あっという間に前方に迫る。しかしシギルの操縦する機は、左右に華麗ともいえる格好で回転し、ことごとくこれを避けた。

事態の深刻さを知らない第三者がみれば、アクロバット飛行ショーでも、おこなわれているのかと思うほどだ。

「管制塔! F305号機はこのまま、いったんコースを抜けます! 許可をください!」

シギルの声に、管制塔は慌てて応えた。

「ラジャー!？」

許可がおりると同時に、F305号機はコースをはずれた。するとまたシギルから、管制塔に連絡が入った。

「加速装置の機能を回復してください!」

「そ、それは無理です! 直接機内を調査してみないことには?

「加速装置はシステムエラーのようです!」

「えっ、え??」

「機とつながっているシステムにアクセスしてください!」
「ど、どうやって……?」

「ターミナルから、センターパスワード画面を呼び出して、今から
いうコードを入力してください!」

「は、はい!」

「H1093A5612#0012001Y31-3612OP9
61WWBO!」

「……う、打ち込みました!」

「次、F305G100SCONTROL!」

「……アクセス画面が開きました!」

「エディットを選択してプロバイディングの再構築をしたあと、
診断と修復のコマンドを入力してください!」

言われるまま管制塔員が打ち込むと、F305号機の加速装置工
ラーは、あっけなく解除され、修復された。同時にスピードは徐々
に弱まり、通常運行レベルまでダウン。

シギルは大きく肩を揺らし、何度か深呼吸した。額には小さな汗
の粒が無数に浮いている。的確で冷静な対処をし、大業を余裕で成
し遂げたようでも、本人は無我夢中で、いっばいっばいだっただ。
だ。

シリングはその様子をのちに仲間語り、少年の勇気を褒めなが
ら、ついでに自分の不甲斐なさを反省した。

シリングは言った。

「すまない。私がしなければならぬことを」

シギルは唾をのみ込んで呼吸を落ち着かせ、額の汗をぬぐいつつ
微笑んだ。

「いえ、軍曹と乗ってなかったら、たぶんパニックになって、こん
なにうまく切り抜けられなかったと思います」

二人は和やかに笑みを交わすと、ひと呼吸おいて管制塔と連絡を
とった。

「今から着陸態勢に入ります。誘導お願いします」
「ラ、ラジャー!？」

管制塔からは深い安堵のため息と、明るい歓声が響いた。また、この一連のやりとりを逐一聞き、超人的な操縦を目の当たりにした士官や訓練生一同は、舌を巻いて絶句した。

「ターミナルからセンターパスワード画面を開いて戦闘機のシステムにアクセスする」などというのは、管制塔に長年勤めている者ですらしたことがない非常な行為だ。それをアツサリ指示してのけた度胸は並ではない。もはや「どうして第一希望に空を選んでなかったのか不思議なくらい」だった。異例の出世を果たしたのも納得である。

いくら優秀といっても、いきなり伍長に就任した少年に不信感をいだき、内心で嫉妬していた士官や同期生はいた。だが、そんなわけばかりは彼らの中から今の一瞬で吹き飛んでしまったのだ。

「お、驚いたな。本当に初心者か？」

横で啞然と、口を開けたまま空を見上げているデモンズ・バーン少将の問いに、ファウストも驚きを隠せない様子で返答した。

「俺が、知るか」

翌日。

シギルは新入隊員寮と陸軍兵一般寮の境にあたる屋外通路を横切って、ルーク・リースに会った。ルークは見知らぬ新入隊員の少女と談笑しており、声をかけるのはためらわれたが、無視するのも妙なので、結局あいさつした。

「やあ、ルーク」

するとルークは軽く敬礼し、「お疲れさまです」と言った。同期で親友であっても、もう立場が違うのだ。それがシギルには少し寂しかった。

「ほら、おまえも敬礼しろ。話しただろ？ 空軍伍長のシルバー・クラウズ・ラインビルだ」

ルークは傍らにいた少女を肘でつついた。少女は栗毛に大きな鳶色の瞳で、可愛らしい顔立ちをしている。美少女と言っている。急に緊張した面持ちで敬礼する様子も初々しく、シギルは胸がくすぐたくなつた。

「伍長、妹のマデリーンです。よろしくお願いします」

ルークの紹介に、シギルは目を見張った。

「妹、いたの？」

「はい。実は去年、一緒に入隊試験を受けたんですが、自分だけ合格しまして」

「今年を受かったんだ。良かったね」

シギルが言つて微笑みかけると、マデリーンは顔を真っ赤にした。「はい」

その肩に、ルークが優しく手をのせる。

「俺たちシーランだから、この一年、離れているのは結構きつかったんですけど、ほんと良かったです。もし今年もダメだったら、俺も辞めるしかなかったし」

思わぬところでのルークの告白に、シギルは衝撃を受け、深く傷ついた。ルークがシーランであることを知らなかったことはさておいても、邪気のない台詞に悪意を感じたのだ。

統計上、シーランの兄弟を引き離してられるのは短くて三年、長くて二十年だと言われている。それを越えると精神に深刻な影響を与えるからだ。どういう形で、また何年で出るかは個人差があるようだが、なんにしてもロスレイン兄弟はギリギリである。シギルとしては、兄が心配だった。

（俺たちは何故、この兄妹のようにならねないんだろう）

答えの出ている問いを心の中で反復してみると、軽いめまいに襲われた。

十六年経つた今でも弟を捜している兄。去年までそんな兄がいる

ことも知らずに過ごしていた弟。再会した今でも視線を交わすこと
すらない兄弟。同じ兄弟を持つシーランでありながら、なんと
違うだろうか??と。

（どうして俺は、セフィラなんだ）

シギルは腕が震えそうなのをおさえようとして、グツと拳を握っ
た。その顔からは笑みが消え、瞳からは輝きが失われた。

兄弟姉妹で軍隊に勤めているシーランは多い。なにもルークが特
別なのではない。それでもシギルの心は軋んで、居たたまれなくな
ってしまっただのだ。

表情が一変して暗く沈んだシギルを見て、ルークは少しだけ困惑
した。気に障るようなことをした覚えはない。あつたとしても、シ
ギルなら怒ったりしないとは知っているからだ。それほどシギルは普
段から温厚だった。まして潔白なルークにしてみれば、ここで嫌な
顔をされる筋合いはないわけで、通常なら冗談口調で文句のひとつ
も言っただけだ。が、いまや上司であり、前例がないだけに
対処法がわからないでいた。

「気まずいなと思っていると、わずかに我に返った感で、シギルが
言った。

「とにかく合格したんだ。良かったじゃないか。これからも、がん
ばって」

それは、そっけなく淡々とした口調だった。

「それじゃあ」

と会話を打ち切るシギルの視線は、もう兄妹を見ていない。二人
のわきを通り過ぎ、空軍士官僚のある方角へと去って行く。その場
に残されたマデリーンは、兄ルークに向かって言った。

「聞いているより、冷たい感じの人ね」

ルークは眉をひそめながら、肩をすくめた。

「いや、いつもはもつと愛想がいいし優しいよ。今日は珍しく虫の
居所が悪かったんじゃないかな」

午後六時。

夕食を終え、食堂を出たルークがマデリーンと楽しげに歩いていると、向かいからやって来たサウスに止められた。

「お、交際は禁止だぞう？」

ルークは、相変わらず上司らしくないサウスを見上げて顔を引きつらせ、笑った。

「妹のマデリーンです、大佐」

サウスは、とたんにそっぽを向く。

「なんだ、おもしろくない」

「大佐！」

不埒な上司をたしなめるべく、ルークは声を上げた。しかし、そんなことに動じるはずもないサウスは、ふと真面目な顔で話題を変えた。

「おまえ、確かシーランだったな」

「はい」

「うーん、あんま顔合わせるこたないだろうけどなあ……」

「はい？」

「空軍大佐のファウスト・ロスレインは、知ってんだろ？」

「はい」

「間違っても、そいつの前で可愛い妹の自慢とかするなよ」

ルークはキョトンとした。

「なぜです？」

「ファウストもシーランだ。生き別れた弟を捜して、もう十六年だ。その心中を想うとな。わかるだろ？」

「あ」

ルークは、隣で聞いていた妹とともに息をつまらせた。視線を交わし合う二人の視線は、せつない。ネオ・ゲノムのサウスには共感できない世界が、そこにはある。

シーランにとって兄弟姉妹を失うことは、誰のことでも他人事ではないのだ。いつか自分も直面する苦痛である。まして十代や二十代の若さで経験してしまうとしたら、それは生きる希望すら失ってしまう悲劇である。

（そっか。ロスレイン大佐があんなふうなのは、弟のことがあるからなんだ。つらいだろうな。俺もマデリーンを失ってしまったら、きつと同じように心を閉ざして……いや、とても生きていられないんじゃないかな）

ルークはそう思う一方で、昼間のシギルを思い出していた。どうして思い出したりしたのか分からなかったが、らしくない彼の態度が小さなトゲとなって胸にひっかかったのだ。

（なんだろう、この感じ。変だな。なんだか、とても苦しい）
兄妹を沈黙させてしまったサウスは心持ち立ち去りづらくなり、助けを求めるように兄ルークを見た。が、それはすぐ後悔に変わった。

「んなつ、おまえつ、なに泣いてんだよ！　まるで俺が泣かしたみたいじゃねっかよー」

ルークの両目からは涙が流れ落ちている。指摘されて横から兄を覗いたマデリーンも、さすがに驚いた様子で「大丈夫？」と声をかけた。だがルークは涙をぬぐおうともせず静かに泣き続けた。妹の気づかいすら効果がないとなると、そうとう重症だ。

「おいおい、勘弁してくれよな」

「すみません。でも、なんだか悲しくて」

「いや、ま、謝らなくてもいいけどよー」

サウスは困ったように頭をかきつつ、途中、通りかかった同僚に冷やかされながら宙に視線をさまよわせた。

（おーい、誰か助ける）

それからしばらくは、所属が違ふこともあつてシギルとルークが直接会うようなことはなかったが、たまにすれ違ふと気まずい空気が流れた。シギルは妙な態度をとつたことを後悔していたし、ルークはルークで「たぶん知らないところで傷つけてしまったんだろう」と思い悩んでいたが、お互いに歩み寄る機会を得られないまま時が過ぎてしまつていたので。どちらかが、ちよつと声をかければすむことなのだが、それも簡単なようであつて、むずかしいのだつた。

一三八七年十一月一日。

南大陸に寒気が押し寄せてくる季節である。この時期、第二地球惑星では北半球が夏を迎え、南半球が冬を迎えるのだ。

グラウコスでは二年生に深緑色のロングコートが配布された。裏地には保温効果の高い特殊な生地が使われており、マットな仕上がりの表地は撥水加工がほどこされている。この衣替えにもなつて、記章やネームバッジもコートにつけ替えられた。

シギルは士官用の黒いコートをもらった。上等兵以下の兵士に渡されるような標準サイズ別の配布とは違い、オーダーメイドだ。十月初旬に寸法を測り、成長も見越して、しっかり仕立てた。が、二ヶ月に一センチ背が伸びている現状を思うと、すぐに補正行きだろう。

そんなささいな面倒事を新たにかかえつつ、シギルは訓練場への道を歩いていた。すると待ち伏せていたらしいサウスに会つた。一七三・五センチとまだまだ小柄ながら、コート姿もサマになっているシギルを見て彼は、

「シルバー！ 最高だな。よく似合つてる。萌えだ、萌え！」

と両腕を広げ、大声を張り上げた。シギルは顔を真っ赤にして歯ぎしりした。

「やめてください！ 恥ずかしい！」

朝一の台詞がこれである。半分どころか、全面的に冗談で生きていると思えないサウスに絡まれるとは、あまり良いすべり出しとは言えない。

「いーじゃん。褒めてんのに」

「良くありません」

「照れちゃって、かわいいねえ〜。そのウブなところがオジサンにはたまらないよ。十七歳なんて、おいしい年頃だよな〜」

（まだ十六だよ）

シギルは無言で突っ込んだ。誕生日も詐称しているのだ。といっても四十日程度だが……

「大佐の歳でオジサンなんて言ったら、本物のオジサンに怒られますよ？」

「ん〜、俺は中身が古くさい男でね。実年齢よりずっと年寄りなんだ」

「そうですか？」

「そうだよ〜」

（いや、とてもそうは思えないけどな）

シギルの疑わしい視線に刺されても、サウスは気にする素振りもなく、軽く少年の背を叩いた。

「さ、もう行こうぜ」

と歩を踏み出す。シギルはつられるようにして、サウスと並んで歩いた。本日の出勤先は同じなのだ。

「今日は陸空の合同訓練だなあ。楽しみ楽しみ」

ウキウキしながらニヤけるサウスを、シギルは横目に見た。

「なにが楽しみなんですか」

「バツカ、そんなの決まってるじゃねーか。おまえにちよっかい出すこと&不機嫌なファウストをおちよくること！」

シギルは二〜三回口を開閉させて、立ち止まった。

「タチ悪う〜！ そのうち絶交されますよ」

よりによつて兄弟そろつて的まとだというあたりが、さらに最悪である。だがサウスは立ち止まったシギルをかえりみて、ニツと笑つた。「心配すんな。俺なりの愛情表現さ。アイツもそんなこと、よく分かつてる。でなきや、とつくに犬猿の仲だ。そうだろ？」

シギルは返事もせず、うなずきもしなかつたが、その青い眼差しで肯定の意を表した。口は悪いし、お調子者だし、遠慮も配慮もないようだが、なぜか周囲の人間に慕われている。それがサウス・ウイビーンという男だ。

サウスは満面の笑みで相槌を打つと、シギルの手を引いて駆け出した。

「ほら、士官が遅刻じゃ、シャレになんねーぞ！ はっしれ〜！」

こうして、合同訓練に使用する陸軍管轄訓練場内に入ると、二人はとたんに不機嫌そうなファウストと出逢つた。彼が不機嫌な理由は、サウスには察することができた。自分を嫌つて避けている少年と連れ立って現れた、サウスへの不満だ。彼の行為は、わざわざ陰悪なムードを作ろうとするものだ。

しかしサウスはいつものテンションで指を鳴らした。

「やったぜ！ さつそく不機嫌」

ファウストは眉間を寄せた。

「アホ。朝っぱらから、ふざけるな」

「俺は時を選ばない男だ」

「偉そうに言うな。それは欠点だろう」

「長所にしとけて」

「できるか」

ファウストは、言葉ではサウスを否定しつつ笑みを浮かべた。彼は何時なんどきも変わらない陽気な友を愛しているのだ。シギルは、遠慮のない言葉を交わし合う二人の間に、同じ戦場で戦い、ともに死の窮地をくぐり抜けてきた者達が持つ、独特な雰囲気の友情を感じた。

(……いいな。俺もいつかこんなふう二人と話したい。たぶん無

理だけ)

シギルは暗い想いを断ち切るように、軽くサウスの腕を叩いた。

「俺、先に行きますよ」

「お？ おお」

サウスを置いて、シギルは百メートルほど先に見える集団の中にさっさと消える。こんな時、彼の心中を知ることのできないファウストとサウスは淡々と、そろって同じ意見を口にした。

「相変わらず苦手意識があるようだな」

だがファウストは敬遠されていることに対して(いい気はしないが)ある程度開き直っていたし、サウスはそういうことに頭を悩ますタイプではなかったので、言葉に中身はない。「肌が合わないものは仕方ない。仕事が円滑にいけばそれでいい」ということだ。

「俺たちも行くか」

サウスが言った、その直後。出勤命令を知らせるサイレンが鳴り響いた。

？陸軍および空軍に所属する部隊に告ぐ。ディストール西部で地滑り、土砂災害発生。自治体より救援要請あり。至急、各上官の指示にしたがい、出勤せよ？

放送を聞き終わると同時に、ファウストは慣れた動作で近くの内線機を取った。内線機は情報部に通じている。

「人身の被害報告は？」

？今のところありません。主要道路が封鎖されている模様。岩盤などの落石があるようです。二次災害にご注意ください？

ファウストは内線を切り、サウスと歩き出しながら、報告を反復した。

「人身の被害は今のところない。主要道路は封鎖。落石あり。二次災害の可能性もある。こっちはへりを用意する。あとは任せた」

「了解」

災害時の出勤はグラウコスの場合、今後、規模の大小で指揮官などの変更がある場合でも、まだ現場を見ないうちは大佐である者が

指揮をとる。特に陸地における災害では陸軍大佐が、海難などでは海軍大佐が主導権を持つ。空軍はどちらにおいても出動する代わりとってはなんだが、性質的に補佐役にまわる。

しかし実のところ、「補佐」は主導権を持つ者と同等の力量か、それを上回る実力を兼ね備えた者でないと務まらない。補佐役は主導者を監視し、必要があれば軌道修正をうながすがアドバイザーであるからだ。万が一の場合は全責任を負わねばならない。

現時点で空軍大佐の地位にあるのがファウスト・ロスレインであることは、陸海ともに頼もしいかぎりだった。彼との仕事には間違いない。「カリスマ」と呼ばれるだけのスキルと実力は当然兼ね備えているので、安心して仕事に取り組めるのだ。

訓練開始のために整列していた兵士たちは放送後、将官の指示にしたがい二人の大佐がやって来るのを待っていた。大佐が集団の前に立つ将官に敬礼すると、将官の一人が「頼む」と指揮権を明け渡す。二人は各所属部隊隊員に対して正面を向いた。

「デイスツール西部において地滑り、および土砂災害発生。人身被害報告なし。主要道路封鎖。落石あり。二次災害に注意し、現場へ向かう。まず四人乗りのヘリを五台出す。操縦士は俺とケイト・ゴードン大尉、シヨウ・カワサキ先任准尉、アンバー・マクウェル上級軍長、シリング・カーター軍曹。副操縦士にクリント・マール少佐、ヤン・シュウリン少尉、シエラ・ハーネスト准尉、ナタリー・クルー軍長、シルバー・クラウズ・ラインビル伍長。各自、上等兵一名、二等兵一名を選出し、急行せよ。ほかの者はここで待機。要請があればルーヴ・サーヴァル・メイレン中佐の指示にしたがって行動すること。以上」

ファウストの指示が完了すると、各士官はすばやく動いた。シギルもそれにならったが、内心、穏やかではなかった。ファウストの指名を規律にそって組み合わせると、士官の最下位であるシギルは最上位のファウストと行動しなければならぬ。言葉にできない動揺が走った。

（落ち着け。落ち着くんだ）

シギルはしきりと自分に言い聞かせた。

（指示にしたがっていればいいんだ。それだけで、いいんだから）
そんなことを思っているあいだに、ファウストは上等兵、二等兵
を選出し終えて、ヘリへ急ぐようにと命令している。シギルは重い
足を引きずるようにして、ヘリポートへと急いだ。

方やサウスは、まるで別人の面差しで隊員の前に立っていた。真
面目なだけが取り柄というような、厳格さを絵に描いたような眼光
の鋭さだ。普段のふざけている彼しか知らない二年生は、そのあま
りの凛々しさに啞然とした。

「デイスツール西部において地滑り、および土砂災害発生。人身被
害報告なし。主要道路封鎖。落石あり。二次災害の可能性がある。
気を引き締めて行ってくれ。向かうのは二部隊、各百二十名。三十
名ごとに小隊を作つて八隊体制を組む。中隊長にリブ・デリー少佐、
アリーシャ・オーウエン大尉、小隊長にセイル・ニカラフ少尉、ベ
ラルニ・ラチヨス先任准尉、ジム・ギルバート准尉、ジョン・ウツ
ド先任曹長、ヨン・スウ・イー曹長、トイチ・アカザワ軍曹、コリ
ー・グリッド下級軍曹、ツール・ダナン伍長を任命する。第二部
隊は現地到着後すぐに調査へ向かい、空軍と合流。第一部隊は迂回
路の確保にあたって利用者の誘導および近隣住民への注意と作業内
容の説明を頼む。残りはこの場で待機。ケビン・タイラー中佐の指
示にしたがうこと。以上！」

災害規模は予想以上に大きかったが、あらためて援軍を要請する
ほどではなかった。約二十メートル間の主要道路が、地滑りではが
れ落ちた十階建てビルに相当する大きさの岩盤によって破壊されて
いる。片側は谷で、くだりきった所から二キロほど先に集落が見え
る。細かな土砂などが流れ続けていて、危険極まりない。

「周辺住民はただちに非難させてくれ。これから岩盤の撤去作業を行う。工事車両をまわせ」

サウスが部下に指示し終わると、すぐ横でファウストが計算書類を広げた。

「持ち合わせのダイナマイトじゃ足りない」

「マジで？」

「今、本部に連絡して持つてこさせているが、さっきより天候が悪くなった。撤去は明日に持ち越しになるかも知れないな」

「うーん。じゃ、準備だけでもやっとくか」

「そうだな」

というわけで、岩盤が今の位置からズレないようにするための処置と、ダイナマイトを仕掛けるための穴を開ける作業が始まった。ビルひとつ解体するのに匹敵する作業だ。グラウコスの精鋭をもつてしても、撤去は困難をきわめそうだ。

谷の足場は悪く、小雨まで降りだした。コートの表面はフォームル着のようなマットな質感でありながら高い撥水性があつて簡単には濡れないが、南大陸の中でも最南にあるディストール地方は寒い。小雨が雪に変わるだろうということは誰にも予想できた。機能に優れた軍服とはいえ、寒さを防ぐのには限界がある。

「今日は夜を徹しての作業になりそうだが、みんな風邪引かないようにな」

サウスは全員にそう声をかけて、励ましてまわった。息はすでに白い。

シギルはこまごまとした作業を手伝いながらも、少し申し訳ない気持ちで、その様子を眺めていた。力を使えば岩盤のひとつやふたつ、始末するのは簡単だ。きっとみんな助かるだろう。だが使えるい??そんなもどかしさに心が揺れたのだ。

それでもシギルは「絶対に力を使わない」と固く胸に誓わざるを得なかった。彼は一度も、自分がセフィラでよかったと思つたことはない。たとえ誰かを救えても、待っているのは偏見だろうと信じ

ているからだ。今できることと言えば、せめてまったく力に頼らず、みんなと同じ苦労を分かち合うことだけなのだ。

陸空合わせて、最終的な現地到着時刻は午前九時。調査や避難勧告、迂回路の確保などに要した時間が三時間。休憩一時間はさんで本格的な作業開始から、まもなく五時間が経とうとしていた。あたりはすっかり暗い。各所に置かれた照明がチラチラと舞う雪をきらめかせ、もの悲しい陰鬱とした情景を作り出している。

「よし、みんな休憩だ。腹ごしらえしよう」

サウスが言うのを待ってましたとばかりに、みんなは作業を中断し、近くのヘリポートへ移動して夕食をとった。食事は陸軍の一小隊が一時間ほど前から炊事班となつてこしらえた、スープ類中心の暖をとりやすいメニューだ。

「あーっ、生き返るなあ」

「まったくだ」

みなは言い合いながら、食事を口に運び、会話に花を咲かせている。シギルは、そんな人々を眺めて心身を暖めた。

（グラウコスは、いい人達ばかりだな。博士が俺をここへ送つた理由が、わかつた気がする。いつかきつと受け入れてもらえる日が来るんじゃないかと思える……けど）

そしてふと、ルーク・リースの姿を見かけて驚いた。彼は第一部隊で空軍と合流せず、作業開始後も近くにいなかったのだ、シギルとは顔を合わせなかったのだ。

（なんだ、ルークも来てたのか）

シギルは声をかけてみようかと思った。しかし今一歩、足が動かなかった。なにげない言葉で話しかければいいというのはわかるが、その言葉が思いつかないのだ。頭の中で右往左往していると、突然、中央付近にサウスが立って、大声でみんなに注意をうながした。

「今みんなが作業してくれている岩盤向かって左側は、これ以上の立ち入りは危険だ。五メートル以内には近寄らないようにしてくれ。」

作業はそれより右側だ。よろしく頼む。今日の仕事はあと少しだから気合い入れていけ！ おまえらだけが頼りだからな！ ケガなんかしてくれるなよ！」

士気を鼓舞しようとする彼に応えて一同は、いつせいに声を上げた。

「イエス・サー！」

総勢二百七十名の軍人の声は圧巻である。疲労もピークを迎えようかとする兵士も腕を上げて応え、なえた心を盛り上げた。サウスはやはり「大陸の龍」の名に恥じない男だと、シギルはうなずいた。

腹も心も満たされた兵士らは、残りの作業に従事した。「今日をしつかりしておけば明日が楽だ」という思いを胸に励んだ者もいる。個々の努力が実って、夜は二時間ほどで作業が完了した。

「よし！ 完璧！ よくやってくれた。今日はこれで引き上げるぞ。第一部隊三班！ 先に行つて、テント張ってくれ」

サウスの指示が飛び、部隊は引き上げの準備に入った。第一部隊三班は、ひと足先にヘリポートへ向かう。

「あ、ちよつと、待つてよ！」

不意にルークの声が聞こえて、シギルは上向きにふり返つた。岩盤の上で作業をしていたルークがおりてくるのを認めた。彼はどうやら第一部隊三班のようだ。慌てつつも慎重にくだる。だが、あたりの暗さと焦りが判断を誤らせたようだ。彼は立ち入りを禁止されている場所へ降り立った。

これを谷のほうから見ていたサウスが、とがめかけた。シギルの耳には同時にゴゴゴ……という地鳴りの音が。見上げると、小石がパラパラと転がっている。次の瞬間、岩盤向かって左側壁面にすさまじい勢いで亀裂が入った。シギルはとっさに叫んで地を蹴った。

「ルーク！ 危ない！」

シギルの声にハツとしたのが先か、突き飛ばされたのが先か？ かるうじて安全圏にある道端に転がって半身を起こしたルークが目の当たりにしたのは、新たに六メートル四方の岩盤が、大量の土砂と一緒に崩れ落ちたあとの光景だ。

周囲からは悲鳴があがり、谷のほうからはサウスが血相を変えて駆け登ってくる。

「シルバー！」

ルークは真っ青になり、膝をガクガクと揺らした。サウスはそんなルークの襟首をつかんで立たせ、思いつきり頬を引っ叩いた。

「おまえはっ、俺の注意を聞いていなかったのか！ ヘリポートへ行つて救護班を呼べ！ 早く！」

「は、はい」

泣きそうな部下を叱咤した口調のまま、サウスは近辺にいる者をすばやく集めた。

「大至急、ラインビル伍長の救出にあたる。疲れているとは思つが、もうひと息がんばってくれ」

「イエス・サー！」

ルークは前に転びそうになりながら、ヘリポートへと急いだ。そして先に引き上げてキャンプ設置の指導をしていたファウストの顔を見るなり、泣き出してしまった。

「どうしたんだ」

ファウストは驚いて尋ねながらも、ルークの右頬が赤く腫れているのに気づいた。

「喧嘩でもしたか？」

するとルークは、

「シ、シルバーがっ、俺を助けて岩盤の下敷きに」

と嗚咽しながら答えた。

ファウストは目を見開いた。刹那、左肩に痛みを感じた。痛みはすぐに失せたが、ついで、えもいわれぬ不安に襲われた。

「それで？」

「ウィビン大佐が、は、早く救護班を呼べ、って言って」

頬はサウスに打たれたのだろうと、ファウストは察した。

「わかった。おまえは現場へ戻れ」

「は、はい」

ファウストは踵を返し、ヘリに向かって走った。通信機を取り、本部へ救護班を要請すると再びひるがえって、あたりの兵士をかき

集め、現場へと急行した。

救助活動はサウス指揮のもと始められていた。ファウストはサウスに寄って声をかけた。

「サウス、どうなってる？」

ふり返ったサウスは眉をひそめた。一目瞭然のこんな場面で「どうなってる」とは、あまりにも彼らしくないと思ったのだ。

「動揺してんのか？ そりゃ俺だっしてしてるけど」

「すまん」

「いや、おまえの部下だもんな。動揺して当たり前だ。申し訳ない。これは俺の不始末だ」

「……」

「とりあえず、あいだに入り込んでいる土砂をかき出している。あの程度までいったら端から岩を削る。その繰り返しだな。手作業でないと無理そうだから時間は覚悟してくれ」

「救護班はウエスト・ラプウイングから来る。到着まで一時間かかる。状態によつては、ここから車で三十分のところにある救急センターに搬送したほうがいいだろう」

「ああ」

ひととおり会話を終えると、二人は黙々と作業を進めた。無情にも雪は激しくなり、一日労働してきた兵士たちの身体に鞭を打つ。数十分。

着けているだけで革手袋は役に立たない。ファウストは凍える手で土をかきながら、まるで墓土を掘り返しているような錯覚におちいった。たとえ一分で救出できたとしても生存の可能性は低い。それなのに、これほどの時をかけても見つけられずにいるのだ。不安よりも絶望が募る。

再び胸がざわついた。

（こんな状況には嫌というほど出逢ったはずだ。もつとひどい現場にいたこともある。目の前で仲間を失うなんてことは軍人ならば多

々あることだ。悼む気持ちを常にいだいては捨て、乗り越えねばならない悲しみを乗り越えてきた。しかし過去のどんな場面にもなかった苦しみが、ここにはある??なぜなんだ。息がつまる。心臓が張り裂けそうだ)

おのれが当惑する意味も解せぬまま、ファウストはただただ、一心不乱に土砂をかき出した。

(ラインビル、頼む、生きていてくれ)

すると突然のように、壁面と岩とのあいだに隙間が現れた。窮屈でも少年一人ならば、なんとか入っていられそうな空間だ。

ファウストは、はやる気持ちをおさえられず、取りついて声を上げた。

「ラインビル！ 返事をしろ！」

直属の部下でも間接的な付き合いしかない。上司としても好かれていないようだし、優秀なだけに面倒もみる必要がなかった。ここまで不安を駆り立てられる理由はないはずだ。だが今朝、同じへりに乗って来たばかりだ。ついさっきまで、となりに座っていた。そう思うと居ても立ってもいられなかった。

暗く冷たく閉ざされたわずかな空間で、シギルはかすかな息をもらし、不意に意識を取り戻した。左肩に激痛が走る。

「うっ」

あからさまに力を使うわけにはいかなかったが死ぬわけにもいかず、ルークを自力で突き飛ばしたあの隙に、岩の重量を落下しきる寸前、十分の一に軽減させ、すかさず壁面と岩のあいだに滑り込んだのだ。おかげで左肩をしたたか打った以外にケガはない。しかし、さすがに衝撃を受けて気を失っていたのだった。

(まいったな。ルークは大丈夫だったかな?)

それから数十分を、シギルはじっと身動きせず耐えた。みんなが

自分以上にがんばっているだろうと思つと、そのぐらいはなんでもなかった。

「ラインビル！ 返事をしろ！」

外気が流れ込んできたかと思つと同時にファウストの聲が飛び込んできて、シギルはギョツとした。せつぱ詰まったような叫びに全身が震え、鳥肌が立った。彼が先陣を切つて自分を呼ぶなんてことは、まったく想像していなかっただけに。しかも、シーランの兄弟という抗えない宿命が彼の血を騒がせているとしか思えない声で？ めつたに感情を表さないファウストが痛いほどせつなく叫号するのを見た者は、憂えるべき状況を忘れて驚いた。サウスですらそうであつたから、これはもう一種の事件だ。

シギルは恐る恐る唇を動かした。

「俺は大丈夫です」

シギルの声を確認したファウストは、三日口にしなかつた水を飲み干したような安堵に満たされた。

「神よ、感謝します」

と小さくつぶやく。

極度の緊張から解かれた彼の深い吐息は岩壁に反響して、シギルにまで伝わつた。シギルはそれだけで、ファウストがどれほどの想いでいたのか理解できた。

その後方ではサウスが満面の笑みを浮かべながら、大声で「ラインビルは無事だ！」と仲間達に告げている。歓声が上がつた。

「やったぞ！ すごい！」

「なんて運のいい奴だ！ まつたく」

この吉報を誰より喜んだのはルークだ。彼はその場へたりこみ、また泣いてしまった。近くの者が彼を起こして慰める。

「良かったな」

そしてシギルの生還を心から喜ぶ人々の声に交じって、またファウストの声が近く響いた。

「すぐに出してやる。がんばれよ」

聞いたこともない優しい声に、シギルは強く目をつむった。泣きそうだった。

（??？兄さんは気づいていない。だけど本能で知っている。魂が、俺を弟だと知っているんだ）

過去、ラウ・コード博士が学者らしくない話をしていたのを思い出す。

『シーランの兄弟は、分けるべきではない一個体の魂を分かつて生まれたと思えるほど、心身に密接な関わりを持って生きる。それは？絆？とひと言で片付けるには強すぎるものだ。私の新しい仮説では、一般に言われている彼らの？失う恐怖？とは、単純に肉体における物質的な喪失の恐れではなく、同じ次元にあるべき魂の別離にともなう精神性の痛み、または欠落し、不安定になることへの恐れと解釈している。そういう考えに基づくと？得る喜び？についても説明ができるようになる。つまり、得れば魂が安定するのだ。それは幸福ではないかね？あの世にいる期間とこの世にある期間が同時進行であればあるほど長い安定が得られ？良い？ということになる。そのことが、たまたま？兄弟愛？という形式をとって表れているのだよ。死に別れる恐怖に勝ち得る喜びとはなにかを追求していくと、これが最も有力な説となりはしないかね？』

仮説はおそらく正しいのではないだろうか、とシギルは思う。でなければ、どうして自分が弟であることを知らないファウストが、空軍大佐の顔でもグラウコースの鷹でもない素の声で、外聞もなく叫ぶことができたろう。

（だけと言えない。弟だなんて言えない。俺は兄さんの？不幸？でしかないんだ。言えるわけがない）

常々感じていたことではあるが、シギルはこの時ほど切実に生まれたことを後悔したことはなかった。

(博士、俺はどうしたらいいんだ。わからないよ。教えてくれ。昔のように心配はいらないと肩を叩いてくれ)

生存が確認されてから、およそ二十分。シギルはようやく隙間から引きずり出された。その彼があまりにもあっけなく立ち上がったのを見て、周囲はしきりに驚き呆れ、また喜んだ。

「こいつっ、心配したぞ！」

と、いきなりサウスが抱きしめる。ちょうど腕が左肩を押さえたので、シギルは思わず声を上げた。

「いつ、痛い痛い！ さすがに無傷じゃないんです！ 離してください！」

「わっ！」

サウスは解放して真剣に謝った。

「すまん！ どこをケガした？」

「左肩。打っただけですが」

「左肩？」

不意にファウストが眉をひそめた。事故の報告を受けたとき、自分の左肩に痛みが走ったのを思い出したのだ。

「どうかしたのか？」

とはサウスがファウストに聞いた。ファウストはやや慌てたように目を伏せた。

「いや、なんでも」

しかし、なんらかの含みを持つファウストの表情をシギルは見逃さなかった。ささいなことでも弟だと知れる可能性があるのに、この事故は大きなミステイクだった。おそらく兄の身に^{おそ}変調があったに違いないと、彼は想像を絶する強い結びつきに畏れをなした。意志の力だけでは太刀打ちできない何かを感じたのだ。

「救護班が到着しているはずだ。ヘリポートへ引き上げよう。歩け

るか？」

懐中時計を見てサウスが言い、シギルはゆっくりうなずいた。そして歩き出しながら謝った。

「すみません。救護班、呼んだんですね」

サウスは「は？」と険しく目元をしかめた。

「あたりまえだろう。大事故だ」

「でも、結局たいしたことなかったのに」

「んなこと関係あるか。無駄足になって良かったぜ。救護班もホツとするだろうよ」

救護班にはドクター・マールロウ氏（五十二歳）が同行していた。

軍医歴が長く、腕が最も確かな医師だ。白髪まじりの黒髪に茶色い目の、痩せた小柄な男。

テントの中にストロープを入れた臨時の診療所が設けられた。そこでシギルは上半身裸になって診察を受けた。

「全治二週間。不便だとは思いますが、私がいいと言つまで腕をあげたりしてはいけないよ。もっとも、あげようと思つてもあがらないだろうけどね」

シギルは自分で考えていたより重い診断だったので、訝しげに医師を見据えた。

「そんなにヒドイですか？」

「ひどいね。打ち身による鬱血の範囲が広いし、おそらく骨にヒビが入っているだろう。よくもまあ骨折にまで至らなかったものだ。気絶しただろう？」

「うっ、はい」

「念のため脳の検査もしたほうがいいね。すぐに病院へ行こう」

「えっ、今から？」

「もちろんだ。なにかあつては手遅れになる。もともと疲労していた身体にこれだけの打撃を受けたんだ。めだつた外傷が肩だけだからと安心してはいけないよ。目には見えないダメージだってあるは

ずだ。明日の昼頃まで検査入院してもらおう。場合によっては二三日の入院も必要だ」

「……」

ドクター・マールロウは黙り込んだ少年をチラリと見やった。

「何故そんなに嫌そうな顔をするのかね」

シギルは焦ってうつむいた。「段階系が判別されてしまうような検査はないだろうけど、もしあったら困る」という一抹の不安が、そうさせたのだ。特に血液型検査は。

「あのね、命があっただけでも拾いものだよ？ 釘を刺しておくけどね、入院にならなくても完治するまで絶対安静だ。わかったね？」

「はい」

シギルはしぶしぶ返事をし、付き添いの看護師に手を借りて制服を着た。そして医師とテントを出ると、心配そうな多くの視線にさらされた。

「どうなんだ？」

とサウスが代表して尋ね、シギルは申し訳なさそうに答えた。

「すみません。これから検査入院です。あと二週間は絶対安静だそうですね」

「ええっ!？」

サウスも意想外だったようだ。それほどシギルはピンピンして見えた。サウスとその横にいたファウストの目が自分に向いたのを確認した医師は、シギルにヘリへ搭乗するように言って追い払うと、二人の大佐と対面した。

「久しぶりだね、ファウスト君、サウス君。元気そうでなによりだ」

「先生もお元気そうで」

「いやなに。ところで彼は、どちらの部下かな？」

「俺です」

とファウストが軽く手をあげた。医師は「ほほお」と感心したように顎をなでた。そして「苦勞するぞ」とズバリ言った。

「実にガマン強い少年だ。あんなのでは医師の私も苦勞する」

どう反応していいのか戸惑っているファウストに代わって、サウスが肩をすくめた。

「なにが言いたいんだよ、ドクター」

医師は「ほっほっ」と笑った。

「なんでもなさそうにしているが、あの肩はそうとう痛むはずだ。おそらく立っているのもツライくらいにな」

ファウストとサウスは不意に目を合わせた。互いに半信半疑な表情だ。

それを見た医師は更に諭した。

「仲間を助けたそうだが、きっとその者に気をつかっているのだろう。しかし、もっと身体の痛みに正直な反応を示してもらわねば処置に迷ってしまう。彼になにかあった時は、見た目の十倍はひどい状態だと思ったほうがいいだろうね」

二人はしばし呆気にとられた。サウスは特にそうだが、二人とも察しのよい人間だ。軍人としてもベテランで、同僚や部下の動向を観察するのは得意なのだ。誰がなにをガマンしているかくらい見通せる。ところが「ラインビル伍長」についてはチラリとも見抜けなかったのである。

「病院まで付き添って行ってもいいか？」

と、ファウストは医師とサウスとに向けて言った。「優秀という先入観から、あまりにも放ったらかすすぎた。上司としてこんなことでは良くない」と反省してのことだった。彼らはその心情をくみ取り、快く賛成した。

「こっちは任せておけ」

「悪いが頼む」

ファウストは医師とともにヘリへ向かった。救護班を移送してきたヘリは五人乗りで、行きの搭乗者は操縦士と医師、看護師一人の三人だけだったので、シギルとファウストが乗り込んで丁度いい。

機内に入ると、シギルは打って変わって具合悪そうに後部座席に腰かけていた。医師の言うことは間違いないようだ、ファウスト

は近寄って声をかけた。

「大丈夫か？」

シギルはわずかに目を開き、右手で顔を覆って息を吐いた。

「麻酔があると、ありがたいです」

続いて乗り込みながら聞き耳を立てたマーロウ医師が、医療バッグに手をかけた。

「早く言いたまえ」

医師はさっそくシギルの肩に麻酔を打った。

「すぐに効く。眠たくなったら素直に寝なさい」

「はい」

ヘリが飛び立った。操縦士の横に医師が座り、シギルは看護師とファウストにはさまれる形で後部座席に身を預けた。ファウストがどういう経緯で同行しているのか判明せず、しばらく困惑していたシギルだが、やがて眠気に襲われると医師の言葉にしたがって目を閉じた。

無意識にファウストのほうへもたれる。おぼえていないはずだが、とても懐かしい匂いがした。

懐かしさを感じたのはファウストも同じだった。しかし彼は「もしかしたら」と考えていた。サウスがやたらと「似ている」と連呼するので、「自分はもしかしたらラインビルに弟の面影を重ねているのかも知れない」と。それならば、少年が生き埋めになっていたあいだの異常な不安も説明がつく。

ファウストは一人うなずいた。

(きつと、そうに違いない)

一三七二年一月末。

テロリストによる襲撃事件の興奮もまだ冷めやらぬ街の中をひとり、幼いファウストはシギルを捜して歩いていった。事件の規模を物語るように、いまだ横を慌ただしく駆け抜けていく人、無残に崩れ去った我が家を呆然と見つめる人、消火活動に追われる消防士、怪我人を担ぎ出す救急隊。数えきれないほどの人間が右往左往していた。日が落ちて薄暗いあたりは、まるで悪夢のように冷たく、人々の動揺を混乱に変えつつたらずんでいる。

「生後二ヶ月くらいの赤ちゃんを抱いている人を見ませんでしたか？ どうかの病院でも施設でも、見かけたら教えてください」

病院も施設もすでに調べ尽くしたというのに、なおも同じ台詞を繰り返しながら棒のようになった足を引きずって歩く。生きた心地などない。ファウストは、このまま自分こそ道端で果てるのではないかと思えるほど、身も心も疲れてしまっていた。

（あの時すぐに受け取っていれば良かったんだ。僕がシギルを病院に連れていけばそれですんだのに、どうして）

挫折しかけて両膝に手をつきうなだれたファウストは、首を強くふった。

（まだ事件が起こったばかりだから、行方不明になっているだけだ大丈夫。すぐに見つかる。二三日も経てば、きっと僕のところに来る）

そこへ一人の少年が声をかけた。

「おい、親はどうした」

ファウストはドキツとして顔を上げた。少年は十二三歳くらいの兵士だ。黒い髪に黒い瞳。深緑の制服を着ている。襟には四つも記章がついていて、胸のネームプレートが臨時灯の明かりを反射して光っていた。

ファウストが軍人を見るのは、それが初めてだった。おまけにハッとするほど美しく、子供心にも見とれてしまった。神か天使でも舞い降りたのかと錯覚するほどだ。だが少年は現実で確かに軍人のようだと気づくと、緊張に固まった。

少年兵士は優しく微笑んだ。

「俺はグラウコス基地の陸海空、すべてに属する上等兵だ。ここへは救援活動に来ている??と言っても、むずかしいか? 名前はブレッド・カール。十二歳。同じ子供だ。リラックスしろ」

「……僕はファウスト・ロスレイン。弟を捜してるんだけど、見つからないんだ」

「お父さんとお母さんは?」

「死んだ。弟は消防士が助けてくれたけど、そのあと病院に運ばれてから分からないんだ」

「弟はいくつだ」

「まだ生まれたばかりだよ。二ヶ月」

「そうか。それは心配だな。じゃあ軍にも働きかけて捜してみよう。おまえはとにかく、ここをウロウロしていても危ないだけだ。こっちへ来い」

先導されるまま、ファウストは軍が緊急に設けた中継基地へと足を踏み入れた。似たような境遇におちいつたらしい子供達が集められている。みな不安に脅えているのか、与えられた毛布にくるまって、上目づかいにホットミルクをすすっていた。夏も終わりに近い季節。夜になると肌寒い。弟を捜すのに夢中だったファウストは今やっと冷気に気づいて、少し身震いした。

「寒いかな? 待っている。すぐに毛布を用意してやる?? シモンズ中尉! 支給用の毛布を一枚くれないか」

ブレッドは軍用車両の中に向かって声をかけた。中からは金髪の中年男が毛布を持って現れた。やや太めのガッチリした体型。いかにも軍人らしい威つい顔立ちだ。

「閣下、もうグラウコスの保護施設は定員を大幅に越えているので

すぞ」

軽く注意をうながしながらブレッドに毛布を渡す。ブレッドはそれを素知らぬ顔で受け答えた。

「たりないのなら造れ。仮設でもなんでもいいんだ」

「そうはおっしゃられても、予算というものが」

「シモンズ、貴様らのようないい大人がそんな腑抜けたことを言っているから、治安はいつまでたつても良くならないんだぞ」

「閣下、私だつてできるかぎりのことはやりたいと思っております。しかし」

「思うだけなら誰でもできる。おまえが実行できないでいるのは、自分のベッドを守りたいからだ。誰が外で凍えていようと自分だけは暖かい家の中に入っていたい？？そうだろう？ 懐が痛むのはそんなに嫌か。資金がないのなら調達しろ。俺の給料をなくしてもいい。おまえはポーナスをいくらもらつていたかな？ 半分でもいいから寄付してみたらどうなんだ」

ブレッドは何事にも容赦ない。シモンズ中尉は脂汗をかいて黙りこくつた。「しょうがないな」というように肩のため息ついたブレッドは、さりげなく毛布をファウストに差し出した。

「さあ、これを。ミルクはあつちで配給してある。もらつといい。一緒に行つてやろう」

そして去り際、シモンズ中尉をふり返つた。

「言い忘れていたが、公ではまだ上等兵なんだ。？ 閣下？ なんて呼ぶのはやめろ」

ファウストも今考えればわかることだが、陸海空、すべての記章をつけている上等兵などない。たとえ士官でもないだろう。ブレッド・カーマルは異例の男で、グラウコス基地の次期將軍だったから身につけていたのだ。

(グラスゲート・チルドレンの王、なんて渾名があったな、元帥は) ファウストはぼんやりと、ヘリの窓から眼下に広がる夜景を眺め、また追憶にふけた。

施設での生活は不思議と平穏だった。その頃はテロ活動の絶頂期で、どこもかしこも一触即発の危機にさらされていたが、施設だけは忘れ去られた無人島のように静かだった。週に一度はブレッドが様子をうかがいに来ていたからだろう。

「彼の目が届く場所は世界で最も安全な場所なのよ」

と、施設に勤める女性が話していたのをファウストは覚えている。

「彼は、グラスゲート・チルドレンの王様なの」

自慢げに語る彼女。十七か八の年頃だったが、幼い少女のように瞳を輝かせていた。彼女にとってブレッドは白馬の王子様だったのだ。

「グラスゲート・チルドレンって、なに？」

「あー、君の歳じゃ知らないか。あのね、歴史的に有名、になるはずよ。まだ歴史というほど古くないから、そう言わないだけ。とにかく有名な話よ」

そう言っただけで彼女が語り始めたのは五歳のファウストには難しい話だったが、語り口調や表情から、それがいかに地獄だったかということを読み取れた。

グラスゲートは、奈落の底と表現してもいいほど無秩序な街であった。ゆえに当時の？グラスゲート・チルドレン？といえば、社会的に蔑まされる対象だった。

荒みきった街？強盗や暴行事件は日常茶飯事。道端には孤児があふれている。事件や事故で両親を失って身寄りのない子供や、ろくでもない親のもとに生まれた子供。そういう子供が自然に集まっ

ているのだ。

彼らを保護するものはない。タダで住処や食事を与えてくれるような大人もいない。それらを得ようとするなら、身体を売るしかすべがない街。それがどんなに地獄であるかは説明するまでもない。

にも関わらず、軍も政府も誰も手を差し伸べなかつたのは、当時そこを支配していたベストラ・ファミリーを恐れていたからだ。

ベストラ・ファミリーとは、麻薬密売や売春婦の斡旋などで収益を得ている巨大なマフィアである。彼らはあるう事が政府や軍と同格か、それ以上の力を持っていた。まさに巨大にして強大な組織だったのだ。

暴力による支配。金による権力の買収。世界を浸食し続けていたファミリーは、もはや向かうところ敵なしだった。

救いはない。底知れぬ闇社会の力に誰もが口をつぐみ、上目遣いにご機嫌を取り、のさばらせていたのである。

だが救世主が現れた。それこそが現在、軍の最高峰に立ち、指揮をふるっているブレッド・カールその人だ。

齢十一。彼はグラスゲートの子供らを集めて組織を結成し、瞬く間にベストラ・ファミリーを一網打尽??完膚なきまでに叩きのめした。

突如として現れたたった一人の子供に、世界を牛耳る組織が潰されたのだ。ニュースは世界を駆け巡った。だがブレッドの詳細が紙面に綴られることはなかった。彼によって報道規制されたためだと言われているが、定かではない。

彼女の話聞いてから五日後、ファウストは街の図書館に連れて行ってもらい、当時の新聞記事を探して読んだ。グラスゲートの様子がどうだったとか、名前こそ伏せられていたが、ブレッドの活躍のすばらしさを前面に押し出した記事が目に入った。この時、絵本などではなく新聞を読み始めたファウストを見て、彼女は目を丸めた。

「新聞が読めるの？」

ファウストはバカにされたと思って少しむくれた。

「読めるよ、もう五歳だもん」

「普通は、まだ読めないんだけどな」

彼女はポソリとつぶやいたが、ファウストの耳には届かなかった。

それから一週間後。ブレッドがいつものように孤児院を訪ねて来たかと思うと、ファウストを呼び出して急に謝った。

「力になれなくて申し訳ない」

深々と頭を下げるブレッド。ファウストは弟の件だということを直感的に悟った。

「病院も施設もくまなく捜してみたが、さっぱりだ。いったい、なにがどこでどうなっているのか皆目、見当がつかない。自我の芽生えている年頃なら、もっと別の角度から捜せるんだが、生後二ヶ月では」

「し、死んだかどうかも、わからないんですか？」

ファウストは唇を震わせながら声を押し出した。ブレッドは暗い表情で一回だけ首を横にふった。彼ほどの人でも、どうしようもないことがあるのだ。ファウストは絶望して泣いた。唇をかみ、声を殺して静かに泣く。

ブレッドは言葉をなくした。五歳という幼さに似合わない泣き方に驚いたのだ。

「声を上げて泣いていいんだぞ。なにもしない俺を責めてもいい」
「やっと言うと、ファウストがキッと顔を上げた。その強い眼差しにブレッドは目を見張った。」

「弟を諦めるつもりはない。僕はシーラんだ。あなたに見つけられないからといって諦めたら？？生きてなんかいられない。死んだことがハッキリしないうちは絶対に、僕の中で生きていなくちゃならないんだ。絶対に」

ブレッドはそっとファウストの肩に手をのせた。

「新聞が読めるそうだな。ビアンカに聞いた。頭はいいのかも知れない。軍隊に入るか」

突然でファウストは放心した。だが、
「軍人は世界中を駆けまわる。おまえの信念が本物なら、いつか弟にも巡り逢えるだろう」

と付け加えられた言葉が希望となって、心が決まった。毅然としてうなずくファウストに、ブレッドが微笑みかける。

「入隊試験を受けられるのは十四歳からだ。待ってるぞ」

(???シギル、おまえはもうこの世にいないのか。だったら俺も生きることを諦めていいか。これ以上は耐えられない。耐えられないんだ。もう限界だ)

ファウストはブレットの励ましにすがって希望を抱き続けてきたが、ここへ来て挫折した。生きていればシギルももう十七歳。兄の存在を知らなければ兄弟のないシーランとして苦悩の日々を送っているはずだが、どこを探してもそのようなシーランの少年はいない。それが、失ったことを認めたくないあまりに目をそらしてきた事実だった。絶望を確信できるほど時間は過ぎてしまったのだ。

へりに搭乗して四十分が経過した。医師は患者の容態を気にしてふり返った。

「ラインビル君の様子はどうかね？」

「寝ています」

とファウストが答える。医師は「それでいい」と相槌を打ち、ふと寄り添うように座っている二人を見て、冗談のように言ってみた。「君たちは、そうしていると兄弟のようだ」

ファウストは苦笑した。

「サウスからもよく言われます」

そう受け答えつつ、胸の内では「ニセモノだ」と反論した。「どんなに兄弟のように見えたところで本物じゃない。面影や雰囲気など無意味だ。そんなことを言ってくる連中もウンザリだ」と。

しかしファウストの闇が見えない医師は、彼にはまだ余裕があると取ってしまい、顔をほころばせた。

「そうかね。はっはっは」

すると医師の笑い声に反応したのか、やおら目覚めたシギルがポーツとした眼差しで眉をひそめた。麻酔が効いているので、起きて

いるようでも半覚醒状態であることを医師は知っていたが、おもしろがって声をかけてみた。

「気分はどうかね？」

返答しないシギルに代わって、ファウストが小首をかしげた。

「話しかけたりして大丈夫ですか？」

医師は二ツと口の端を上げた。

「君は部下のことをよく知りたいから、ついて来たのだろう。彼はいま一種の催眠状態だ。本心を聞くにはいい機会だよ」

「だましているみたいで気が引ける」

「しかし正気の時は、絶対に聞けないよ？」

ファウストが黙り込んだので、医師は再度シギルに話しかけた。

「君たちが兄弟に見えると言っていたところだよ。よく似ているね」とするとシギルは不服そうな表情を浮かべて、ろれつが回らないながらもハッキリと言った。

「似てる？ あたりまえだよ、兄弟、なんだから？」

予想もしなかった言葉に医師は驚き、顔を凍りつかせるファウストを見て固まった。

医師はファウストのことを入隊した当時からよく知っている。シランであることも、幼くして弟を失っていることも。

「忘れるとは言わないが希望を持ち続けるとは言えない。誰でも別れの時は来る。君たちはそれが早すぎただけだ。もう潮時なのではないかね。いつまでも哀しみを引きずって浮かばれないよ」

と、以前から説得していたほどに。状況からいって、彼の弟が生きていたとは思えなかったからだ。

「結婚し、家庭を持つのもいい。弟の代わりと思えるような存在を作るのもいい。いつか時が心を癒すだろう」

とも言った。しかし……少年のセンサーシヨナルな発言が、このごろ少し穏やかになってきたファウストの心を掻き乱してしまった。ドクター・マーロウは自責の念に捕われた。ファウストはまだダメだったのだ。どんなに仲間に恵まれ恋人ができようと、弟を諦める

ことなどできなかつたのだ。してはいけない見誤りだったと後悔した。だがしてしまったものは仕方ない。

「兄弟？ 兄弟なのかね？」

医師は慎重に尋ねた。

「君の名前はシルバー・クラウド・ラインビルだろ？」

「なまえ？」

「そう、名前だ。君の名前は？」

「俺の、名前？？は、シギル、シギル・ロスレイン」

決して「ラインビル」が知らないはずの弟の名前。ファウストは、なにか総毛立つような強い想いに打ちのめされた。出逢つてまだ二年に満たない歳月とはいえ、あまりよく見ていなかったせいで、少年に関する記憶は少ない。そのことだけでも裏切られたような、くやしい想いが渦巻くというのにな？？挫折して死を覚悟したばかりだ。「ラインビル」と兄弟のように見られることを嫌悪したばかりだ。

ファウストの心はかつてないほど荒れた。

「本当なのか？」

絞り出すようにして問うた声はかすれた。だがシギルの意識は朦朧としすぎていて、もう質問に答える力はないようだった。

「博士に会いたい」

頬に少量の涙を伝わせ、彼は再び眠りに落ちた。ファウストはシヨックと動揺とで取り乱した。

「いったい、なにがどうなってるんだ！」

「ファウスト君、落ち着いて！」

医師が声を上げた。

「いいかね、今聞いたことは、ここに居る四人の心の中にとどめるんだ。本人から真相を聞くまで、絶対に口外してはならん」

「どうして」とファウストが突っかかる間もなく、医師はたたみかけた。

「医師として、いや人生の先輩としての勳というやつだよ。考えてもみたまえ。彼の言葉が正しいのなら彼はシーランだ。シーランが

自分の素性や兄弟の存在を知りながら他人になりすまして生きていくのだとしたら、ただごとじゃない。大事に巻き込まれたくないのなら忘れるのがベストだ。もっとも、君には無理だろうな、ファウスト君」

「ドクター」

「君が望むなら、病院に着き次第、血液検査しても構わんよ」

ファウストは息をのんだ。肩に寄りかかるシギルの顔を見つめ、また医師の目を見る。意を決する光がその瞳に宿った。

「よろしくお願いします」

まったくそんなことなど記憶にないシギルは、病院のベッドで目覚めた。朝のさわやかな日差しが窓越しに差ししてくる。病室は個室のようだ。ほかに人の気配はない。

軍立病院はグラウコスとタートルダヴを結んだ中間地点のウエスト・ラブウイングという場所に建っている。のどかな田園地帯だ。秋には麦がたわわに実り、穂が一带を黄金色に染める。美しい土地だ。

シギルは白い天井を眺め、二、三回またいた。

(どれくらい眠っていたのかな?)

と、身を起こそうとして動いてみたが、肩の激痛によって再びベッドに引き戻された。

「ああ、くそっ、いつて」

そこへ病室の戸が開いて、シギルは寝たまま顔を向けた。

「……！」

ファウストだった。

シギルは驚いたあと意外そうな表情を浮かべたが、ファウストはそんなことなど構わず、そばに寄ってベッドの右脇に腰かけた。

「気分はどうだ？」

なんとなく怒っているような雰囲気を察して、シギルは緊張した。しかし、

「起き上がれません」

と不調を訴えると、ファウストはとたんに心配そうな顔をして目を泳がせ、シギルの額から耳のあたりにかけて、何度が優しくなでた。そんなファウストの行動を不審に思わないわけではない。シギルは恐れに揺れる心をおさえつつ、目を合わせた。すると、

「俺のことを知っていたのか？ いつから？ 何故なにも言ってくれないんだ。どうして避けようとする」

と、いくつもの質問をしてきた。シギルの目の前は真つ暗になった。明らかに兄弟だという確信を得た台詞。いったいどうしてなのか、こつちが聞きたいくらいだと。だが聞くまでもなくファウストが答えた。

「憶えていないのか？ 自分から兄弟だと言ったことを？？無理もないか。意識はハッキリしていなかったからな」

「あ……」

とこぼしたきり、シギルは絶句した。

（嘘だろ。夢だと言ってくれ。誰か、これは夢だと）

「血液検査を？？させてもらった」

「……」

「ここまで来て黙っておく手はないだろう。お願いだ、なにか言ってくれ」

シギルは奥歯をかねて深い後悔の念とともに、にがい想いを口の中に満たした。涙は勝手に溢れた。

黙したまま泣き出したシギルに、「責めているわけじゃないんだ。でもそう思ったのなら許してくれ」と、ファウストは言った。そんな気遣いが、シギルには余計つらかった。

「入隊するまで、どこでなにをしていた。ラインビルというのは養父母なんだろう？ 孤児になってからはどうしていたんだ」

ファウストは途切れることなく質問をかぶせるが、シギルは答え

られなかった。IDの中身に本当のことなど、ひとつとしてないからだ。

「聞いたってロクなことはない。俺のことは死んだと思って諦めてくれ」

シギルは渾身の力をふり絞って、やっとそれだけのことを言った。納得してもらえないはずがないと分かかっていても、それしか言えないのだ。

ファウストは声を荒げた。

「生きて、ここにいるのに諦める？ バカなことを言わないでくれ！ 俺が今までどんな想いで捜していたと思ってるんだ。この十七年、死んでいたのは俺だ。おまえを失ってから、ずっと地獄だった」
「現実はおつと地獄だよ。俺の立場は最悪だ。グラウコスに来たのだった、そうしなきゃヤバかったからだ」

ファウストは眉をひそめ、寂しそうにうつむいた。

「俺がいたからとは言ってくれないんだな。どう最悪なんだ？ 言ってくれ。力になりたい」

シギルは口を強く噛んで目をそらした。

「無理だよ。そんなに簡単じゃないんだ。誰かが力になれるほど甘くない」

「俺をバカにしてるのか」

「どうして！ そんなことできるわけがない！」

シギルは思わず興奮した。そのはずみで腕に力を入れたため肩が悲鳴を上げた。

「うつ……！」

痛みに身をよじったシギルへと、ファウストは反射的に手を伸ばした。

「大丈夫か！？」

そして布団の上からシギルの身体を支え、静かに、だが確かな声でささやいた。

「シギル、俺はおまえに何があっても受け入れる。おまえが悪魔の

子で、たとえいつか世界を滅ぼす元凶になつたとしても、そんなことは問題じゃない。問題じゃないんだ」

邪心のない例えはあまりにも核心に近くて、シギルは目を見開いた。

「兄さん」

シギルがぼつりと言つたそのひと言に、ファウストは幸福の境地を見出した。それこそが最も待ち望んだ言葉だったからだ。しかし、「この世で身元不明なシーランはただ一人。軍人なんだから分かるだろ？　それが俺だ。それが？？答えた」

絶望じゃない。悲哀という明確なものでもない。打ちひしがれた心をさらに打ちひしぐ何かを持つて、シギルの言葉は綴られた。ファウストは凍てつく空気に気圧され震えた。

「空軍大佐の弟がそれじゃマズイだろ？　俺は兄さんの人生を台無しにしたくない。足枷になりたくないんだ」

ファウストはわずかのあいだ、部屋に深い闇が流れ込んできたように感じた。窓に反射する光はまばゆいほどであるのに、ここだけが深海の闇に没していると……シギルの心に刻まれた傷が見せている幻影か、おのれ自身で生み出している積年の想いなのか。

ただ彼にわかることは、自分が確かに弟に愛されている、という事実だけだった。そうでなければ、シギルがこうもツライ言葉で自身を傷つける理由はない。

（自分の弟が「セフィラ」であること、それは確かにショックだ。願わくは嘘であつてほしい。だが俺は、もう引き返せない。引き返したくない。生きていた。生きていてくれた。何度あきらめたか知れない命が、こんなに近くで息をしている。その命を目に入れないで過ぎる人生なんて考えられない。そうだろうか？　俺たちはシーランの兄弟だ。離れていたこと自体が異常だったんだ。なのに、また引き剥がそうというのか？？おまえだつて本当は、それでいいはずないだろ、シギル）

ファウストはやるせない心をかかえながら、拳を握つた。

「俺が軍人になったのは、おまえを捜すためだ。大佐なんていうのは別段意味のあることじゃない。望むなら辞めてもいい。だが、おまえの身の安全を考えると、そう簡単には辞められないな。すまない。少し気が動転しているようだ。言っていることが支離滅裂だ。でもわかってくれ。俺にはおまえが必要なんだ」

「兄さん」

「俺たちはやっていけるだろ？ 兄弟として」

シギルはベッドの縁越しに床へ視線を落とした。

「いろいろ問題が多すぎて……ロイに相談したほうがいいかも」

「ロイ？」

「ロイス・ハーベイ伍長」

「ああ、確か世話になったことがあるとか言っていたな」

「GP創立者の一人だ。いい人だよ」

ファウストはわずかに目をむいた。

「なんだって？」

そんな過去を持つ男が何事もなかったように伍長をやっているという事実に対し、ファウストはあきれて物が言えなかった。軍の監査の甘さにも失望してしまう。

「GPでいい人とは、聞き捨てならん」

「GPはテロ組織じゃなかった。少なくとも、スカイフィールズが現れるまでは普通の研究機関だった。ロイはスカイフィールズに敵対して去ったんだ」

「ずいぶん庇うんだな」

ファウストがふてくされた様子で腕を組むので、シギルはため息をついた。

「ヤキモチ妬いてる場合じゃないよ。とにかく軍内で俺のことを一番知っているのはロイなんだ。二人だけじゃ感情が先行して話ができない。客観的にみてくれる人が必要だ。彼は適任だと思う。それが嫌なら、俺は現状を壊す気はない。最低でもスカイフィールズの手から完全に逃れるまでは。あいつが俺を奪還するために、兄さん

を狙わないともかぎらないだろ？」

「見くびるなよ？ スカイフィードズの一人や二人。それにグラウコスにいれば奴も簡単には手が出せまい。だからこそ来たんだらう。おまえのことは絶対に守ってみせる。もう二度と失いたくないんだ」

「俺はまだ、將軍を信用していない」

シギルは自分の力を軍事利用されるのではないかと懸念しているのだ。ファウストは小さく唸った。

「あの男は時の権力者の一人としては珍しく高潔だ。真に実力があるんだらう。決して欲に溺れることはないし、信用するにたると俺は思う」

「今はね。でもいざセフィラを手にしたら？ 人間の心は変わりやすいんだ。大金を手に入れるまで堅実だったとか、政治家になるまで正義漢だったなんてのはザラにいる。將軍はそうならないという保証はある？ 奇跡的にならなかつたとしても、俺の正体を知って戦争をしない手はない。GPに奪還されないうちに叩きたいはずさ。それに、ほかに六ある軍事基地の將軍たちが味方につくとも思えない。日頃からカーマル將軍の足を引っ張りたい連中だって聞いたことがある。將軍のもとから俺を奪い取ろうとする分でも援護はしないだらう。そうなつたら、いくらグラウコスでも全部を相手に戦えやしない。サイコネシスをどの程度のものと思っているかは知らないけれど、たとえ使っても無理だ。そんな前代未聞の世界大戦の引き金になる覚悟なんて、俺にはないよ。笑われるかも知れないけれど、こう見えても平和主義者なんだ」

根の深い問題を投げかけられて、ファウストは頭を悩ませた。シギルの言う事はいちいちもつともだ。しかしだからといって、いまさら他人として暮らすことはできない。セフィラの身の上のことだつて、いつまで隠しておけるのか。結局、待ち受けているのは戦いしかないのではないかと。

（ブレッド・カーマルは、その正義のためにトップ・マフィアを潰した男だ。あの潔癖な精神はセフィラの念動力をもつてしても曲げ

られまいとは思うが……シギル自身が信頼を寄せてくれないければ、協力体制を組むのはむずかしい。もっと冷静な時なら良い案も浮かぶのだろうが、いかんせん再会の興奮で情に流されすぎている。このままでは万全の解決策など導き出せるはずもない??やはり第三者が必要か)

ファウストは腕組みをとき、ため息をもらしつつ懐から携帯電話を取り出した。

「わかった。ロイス・ハーベイに相談しよう。番号を教えてください」

個人休暇のためタートルダヴ基地内の図書施設で悠々自適な時を過ごしていたロイスは、予期せぬ電話に驚いた。慌てて館内から出つつ、携帯電話をのぞき見る。

「はて、知らない番号からだな」

ロイスは不審に思いながら、ゆっくりと耳にあてた。

「はい」

「ロイス・ハーベイか？」

「ええ」

「ファウスト・ロスレインだ？」

「えっ！ ええっ？ お、お疲れ様です。あの、いったい??」

「ウエスト・ラプウイングの軍立病院にいる。悪いが今から来られないか？」

ロイスは眉をしかめた。

「私が？」

「昨日デイスツールで災害があつたのは知っているだろ??」

「はあ」

「岩盤の撤去作業中に事故があつて、ラインビル伍長がケガをした。今、入院している？」

「なっ、なんですと!?! それでっ、彼は?」

「命に別状はない。左肩を傷めたが二週間で治る。おまえに会いたがつている。来てはもらえないだろうか？」

「ええ、それはもちろん」

「すまんが、よろしく頼む？」

通信を断つたあと、ロイスは自室へ向かつて寮の通路を歩いていた。これからさっそく外出許可をもらい、ウエスト・ラプウイングに向け発とうと思つているのだ。そこへ、

「伍長！ ハーベイ伍長！」

空軍兵士の一人が前方からやって来た。

「今、お届けに上がろうとしていたところですよ」

と、小脇にかかえていたA4サイズの茶封筒をロイスへ差し出す。ロイスは受け取りつつも首をかしげた。

「なんだこれは」

「お手紙です。差出人のところに奥さんのお名前が」

ロイスは言われて裏を見た。たしかに？メリツサ・ハーベイ？とある。なぜ普通の封筒ではないのか疑問だったが、筆跡も間違いがない。

「おお、すまなかったな。ありがとう」

ロイスは礼を言い、自室へ戻った。

机の引き出しから取り出したペーパーナイフで封を切る。すると中からは、さらに封筒が出てきた。B5サイズの青い封筒だ。出してみると、一緒に四つ折りにされた紙が出てきた。それはメリツサからの手紙で、ロイスの様子をうかがう内容と、家族の近況を知らせるものとともに、青い封筒のことについて書かれてあった。

？あなた宛にずいぶん前に届いたのですけど、どうしていいのかわからず今日に至りました。なにかとても重要な物のようです。私はあなたが危険なことに巻き込まれるのではないかと心配で送れなかったのです。ごめんなさい？

「メリツサ」

ロイスは愛する妻の名をつぶやき、青い封筒に目をやった。表の消印は二年前。差出人はラウ・コード博士だ。

ロイスは息をのみ、慎重に開封した。中身はおよそ二十ページに渡る書類と、なにかのメモリーカードである。それらを、彼は血の気が凍るような思いで食い入るように見つめた。

ロイスがウエスト・ラブウィングに到着したのは正午過ぎだった。受付で部屋を尋ね、早足で廊下を進む。言われた病室の表札に「シルバー・クラウズ・ラインビル」の名を見つけると、思わず息をついた。

ドアをノックすると、ファウストが出てきた。

「よく来てくれた」

ロイスは一瞬ひるんだ。ファウストの不本意そうな表情が妙に恐ろしかったからだ。

中へ入ると、ベッドの背を起こして昼食をとっているシギルがいた。普段は左利きの彼だが、ケガの影響があるので右手にスプーンを持っている。どのみち両利きなので支障はないようだ。

「具合はどうだ？」

「平気」

シギルが笑みを見せ、ロイスはホツとした。ついで言いたいこともあったが、ファウストを見て口をつぐんだ。

ファウストといえば、ロイスにはあまり構わず、ベッド横にあるイスに腰かけた。

「手が止まっているぞ。しっかり食べないと治るものも治らん。手伝ってやるうか」

「だ、大丈夫だってば」

「本当か？ 無理はするなよ」

「してないよ」

「それならいい」

ファウストはうなずき、シギルの右脚があるあたりの布団の上に手を置いた。

なんとなく目を丸めてしまったのはロイスである。

（なんだ、この異様に仲睦まじい雰囲気は。別に結構なことだが）

ロイスは兄弟を遠目に所在なげな視線をさまよわせた。シギルはそれを察して、申し訳なさそうに笑みを浮かべた。

「ごめん、ロイ。そんなに構えなくてもいいよ。兄さんにはバレち

やったから」

とたんにロイスは脱力した。泣く子も黙るといふ噂のファウスト・ロスレインが、やけに親身になってシギルを気づかいベツタリと寄り添っているわけだ、と。

「そうか。まあ、そう長く隠しておけるものではないと思っていたが、そうか、そうなのか」

シギルは眉をひそめた。

「どうして？」

「君たちは兄弟でないと言い張るほうが、むしろ不自然だからだ」

ロイスの率直な答えに、兄弟は沈黙して互いの顔を見合った。ファウストはロイスの答えに満足しているようだが、シギルは悩ましげだ。

「兄弟だから似てるとは思っているけど、そこまでソックリかなあ」

「ああ、よく似ているよ」

ロイスの言葉に釈然としない顔のシギルを見て、ファウストはムツとした。

「嫌なのか？ まさか本当に俺を嫌って避けてたんじゃないだろうな」

シギルはガツクリとうなだれた。

「そんなわけないだろ？ ただ、それじゃあサウスはどういうつもりで俺を口説いてたんだろうと思うと、なんか？？だって親友とソックリなんだ。おかしいじゃないか」

同性愛者に免疫のないロイスは、それを聞いて背筋に鳥肌を立てた。しかし訳を聞いて安心したファウストは、なにこともないかのような口調で言った。

「そんなことか。あいつは入隊当初、さんざん俺を追いかけてまわっていたからな。ようするに、こういう顔が好きなんだ」

ロイスは石化し、シギルは歯ぎしりした。

「だからっ、なんで友達やってんだよ！」

「なりゆきだな。寝るのは御免だが、友人としては上等だ」

シギルは理解のおよばないことに対して軽く頭が痛くなった。

(なんでそうアツサリ割り切れるんだ。まあ仕事もあるし、割り切らなきゃ気まずいだろうけど)

「そういえばルークは大丈夫だった？」

急に思い出してシギルが尋ねると、ファウストは「ああ」と短く返事をした。ルーク・リースのせいでシギルは危険な目にあっただが、事故がなければ未だ弟のことを知らずにいたと思うと、微妙な気分だったのだ。怒り半分、感謝半分といったところだ。

兄の心情を表情から読みとったシギルは、仕方なくルークの弁護にまわった。

「兄さん、俺は自分の命に保証がないことはやらない。小さい頃から訓練もしている。死なないとわかってるからルークを助けたんだ」

ファウストはスツと冷めた眼差しでシギルを見据えた。ことごとく他人の味方にまわる弟が少し憎らしく思えたのだ。

「おまえは腹が立たないのか？ ケガをしたうえに正体がバレたんだぞ」

「ケガくらい覚悟のうえで助けたんだ。それに弟だったことは遅かれ早かれ気づかれたと思う。……違うな。俺が言いたいのは、そういうんじゃない。なんて言うか、少々危険な目にあっても大丈夫だから心配しないでほしいってことと、兄さんが俺のために誰かを恨んだりしてほしくないってことなんだ。特に仲間内では。兄さんにはもっと、サウスやマチルダと話すみたいにな、みんなとも話してほしいと思ってる」

真意を聞いて嬉しくなった反面、ファウストは首をかしげた。

「俺はそんなに誰とも話していないかな？」

「話してないよ」

よくサウスとするような会話をしてファウストは、「俺はつくづく己を知らないんだな」と、にが笑いした。

「おまえが言うように努力はしてみよう。だがそれもこの先、兄弟

として行けるかどうかが鍵だ。おまえがいなければ俺は抜け殻同然。誰も抜け殻の話すことなんかには耳はかたむけないだろう」

「兄さん」

兄弟のやりとりを離れた位置から見ていたロイスは、ハタと我に返った。

「そうだ、大佐にも事情がのみ込めているなら話が早い。実は重大な知らせがあつて」

彼は言いながらコートの前を開け、懐からB5サイズの青い封筒を取り出した。ロスレイン兄弟はそろって眉をひそめた。

「これは二年前、ラウ・コード博士が私の実家へ私宛に送ったものだ。妻が最近になってやっと知らせてくれてね」

「中身は？」

とファウストが聞く。ロイスは言葉を選ぶように、慎重に口を開いた。

「君たち兄弟の、運命を変えたものだよ」

青い封筒におさめられていた書類は、『数億万分の一のナノクロスと覚醒に関わる可能性の割合』と題されたレポートと、名前を記され、横線で消去されたものが数行ならぶ名簿だった。

ロイスは書類を凝視する兄弟に語った。

「ナノクロスがセフィラ遺伝子を覚醒させるのに必要なものだとするのは承知のことと思うが、これはその覚醒に至る可能性をラウ・コードが算出したレポートだ。それによると、たとえ数億万分の一のシーランを見つけ、ナノクロスに働きかけてセフィラを覚醒させようとしても、成功の確率はゼロとある。ゼロだ。これがどういう意味を示しているか、わかるね？」

ファウストは書類から目をはずし、ロイスを睨んだ。

「シギルの存在はありえないと？」

「そう、ありえない。ところがシギルは例外だった」

「……」

「名簿を見たまえ。そこにはナノクロスを持って生まれたシーランの名が記載されている。みな第一子だ。しかし弟妹が誕生すると線を引かれ削除されている。そう、君たちの名前以外は」

ファウストとシギルは、自分たちの名で行が終わっている名簿に目を通した。年代が違う九組の兄弟姉妹の名前があり、内八組は削除されている。

「彼らが名前を削除されたのは、弟もしくは妹にナノクロスが確認されなかったからだ。博士が、今後セフィラが現れる可能性はないと断言したのを覚えているかね？ レポートに戻ろう。そこには、たったひとつの可能性が示唆されている。百パーセント覚醒する確実な条件？ それは兄弟でナノクロスを持っていること」

二人は青ざめた。酷なことだと思いつつ、ロイスは腹をくくって言った。

「ナノクロスを持つこと、それ自体が奇跡だ。まして兄弟で持つとなると……一卵性双生児でも前例がない。博士が今後現れないと言えたのは、そのためだ。そしてナノクロスが保有されるのは生後五年未満。君たちのことが確認された時、大佐はすでに五歳だった。したがって、セフィラ覚醒の対象となるシギルだけが？？はじめからスカイフィールズは狙っていたのだ。病院からDNA情報を不法に入手し、兄弟でナノクロスを持つ者が現れるのを待っていた。あのテロ事件、すべてはシギルを誘拐するために企てたものだった」

あの日の不幸の真実が白日の下にさらされて、書類を持つファウストの手が怒りに震えた。

「どうやって病院から？ 軍立以外の病院は、全面的に政府の監視下に置かれている。簡単に個人情報を得ることはできない」

ファウストの疑問に、ロイスは首をふった。

「スカイフィールズは大統領と通じている」

ファウストもシギルも、衝撃的な事実に啞然とした。一瞬ロイスがなにを言ったのか理解できないほどに。

「二人は結託し、共謀してシギルを誘拐したのだ。この世の脅威を手に入れるために人民をだまし、軍をもあざむき利用して、世界征服しようともくろんでいるのだ。その証拠はここにある」

ロイスは同封されていたメモリーカードを取り出して見せた。

「直筆の電子サインが入った大統領とスカイフィールズの契約文書、それに対談の様子を記録した動画がおさめられている。このメモリーカードはスカイフィールズのものだ。見覚えがある。奴がこんなものを残したのは、おそらく大統領の裏切りを抑止するためだろう」

「それを」

と、ずっと沈黙していたシギルが唐突に聞こえる口調で言った。

「それを博士は、どうやって手に入れたのかな？」

ロイスはぐつと肩を力ませた。

「命がけ、といったところだろうね」

「……」

「シギル、君にこんなことを言いたくはないが、博士のことは覚悟しておいたほうがいい。もちろんまだ希望はある。しかし」

ロイスは顔をそむけ、うつむいて唇を震わせた。数秒の静寂が漂い、シギルはロイスの言いしめすところを察して、不安な気持ちを誤摩化すように引きつった笑みを浮かべた。

「まさかそんなこと。大丈夫だろ？ 博士はまだスカイフィールズにとっても必要だろ？」

「だいいが。もし私がスカイフィールズなら、絶対に生かしてはおかないだろう。君を逃したことだけでも逆鱗に触れただろうに、これ以上、内側から妨害されてはかなわんからな。もちろん今の段階でハッキリしたことは言えん。あくまでも憶測だ。ただ、これから先そういうことが起こらないともかぎらない。君には今のうちに心の準備をしておいてもらいたい。つらいだろうが」

シギルはシヨックの色を隠しきれない様子だった。ファウストは黙ってシギルの肩に手を置いた。非常な境遇にある弟を自分が支えてやりたい、という意思の表れだろう。シギルはファウストの想いを受け止め、どうにか気を落ち着かせた。

一時間あまり。行き詰まった状況を打破すべくシギルのベッドをはさむようにして三人は膝をつき合わせ、思案に暮れた。しかし多くの組織を相手に、三人寄ったところで文殊の知恵など授かりようがない。

ファウストは肩で大きく息をついた。

「やはりブレッド・カーマルに相談しよう」

ロイスは厳しい顔をした。

「総帥に？ 万が一にも連中に通じていたりしたら、どうするのかね」

ファウストはゆっくりとロイスを見据えた。ロイスの発言は、ただ將軍を疑うというより侮辱したものと受け取れた。

「彼がそんなくだらしない人間であるはずがない」

ファウストが抱くブレッド・カーマル像はあくまでも英雄なのだ。軍人として忠誠も誓ってきた。一片の疑いがあるにせよ、セフィラであるシギルが警戒をして言うのならわかる。だがロイスごときに言われるのは心外だった。

ロイスは、おのれの正当性とは関係なく身を細めた。どんな任務も完璧にこなし、狙った獲物は確実に仕留めてきたというファウストに睨まれては、いかなる偉丈夫だろうと肝を冷やすというものだ。「前言撤回しろ」

「なぜ違つと断言できるのですか」

ロイスは脅えながらも問いかけた。ファウストは無表情に唇を動かした。

「グラスゲート・チルドレンの王だからだ」

落ち着いた声で発せられた答えに、ロイスは戦々恐々とした。

「グ、グラスゲート・チルドレンの？ ブレッド・カーマルが！？」
「そうだ。だからこそ、あの若さで総帥なんかやってるんだ」

ロイスは顔中に汗をかいて絶句した。シギルは一人キョトンとしている。

「なに？ グラスゲート・チルドレンって」

少年の疑問にはファウストが答えた。

「かつて世界中に根を張り恐れられていたマフィア、ベストラ・ファミリアを壊滅させた、孤児による孤児のための孤児だけで形成された組織だ。一小隊ほどの規模だが、敵地に入り込んだのはその内のわずか十五人。まさか女の子や幼年を連れて行くわけにはいかならぬ。その時のリーダーがブレッド。当時十一歳だ」

「……」

「今のおまえよりずっと幼いが、荒廃したグラスゲートに暮らす子供らのために立ち上がった英雄だ。軍も政府も手を出せないでいた悪の巣窟に乗り込んで一掃してのけた。彼の信念は、おまえの力をもつてしても曲げられたりしないだろう」

シギルはうつむき、顔を上げ、またうつむいて顔を上げた。

「兄さんがそこまで言うなら、俺も強く反対できない。だけど」

「だけど？」

「憂鬱だな」

「なにが？」

「俺、ピスマイヤーでグラウコスに大損害与えてるだろ？ いくら欲がないって言っても、あれはさすがに怒ってるんじゃないかな？」

ファウストは沈痛な面持ちで、左手の平に額を置いた。

「ああ、そんなこともあったな。しかし人身の被害はなかった。たぶん怒ってはいない」

「だといいけど」

そのわきで、ファウストの反論怖さに口をつぐんだロイスは、わき起こる猜疑心を押し隠していた。

(ブレッド・カーマルは、知れば知るほど分からん男だ。真実に正義漢だとしても潔癖すぎる。聖人でもそこまで完成された精神など持ち合わせてはおるまい。この世に百パーセント善人などいない。

いるとすれば、それは神か神に近い存在だろう。ありえない。なにが裏があるとしたか思えん)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800/>

ロスト・フィラデルフィア

2011年11月21日20時50分発行